

41489

教科書文庫

4
810
41-1929 200030
1684

200030/684

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

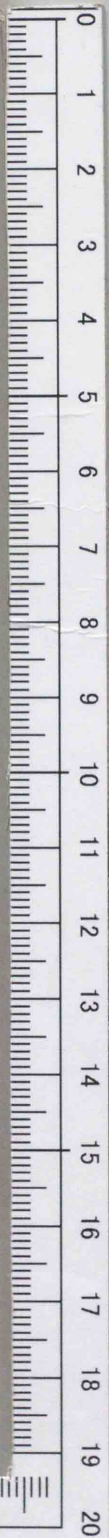


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



國語讀本

改訂版

卷六

資料室

3775
Ue4

國語彙本 卷六

文學博士

上田萬年

共

榮田猛猪

編

鹽野新次郎

昭和改訂版

國語讀本 卷六

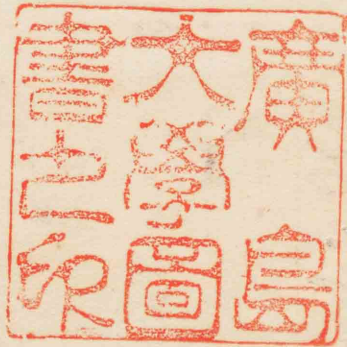
目次

前篇

一 神皇正統記と北畠親房	平泉 澄	一
二 人臣の道	北畠親房	六
三 御民われ(和歌)		三
四 武藏野	國木田獨步	六
和歌二首		三
五 芒	小島烏水	三
六 山雀(詩)	薄田泣菫	七

目次

一



七 空ゆく雁

(曾我物語)

二六

川柳三句

三五

八 白峰の陵

上田秋成

三五

椿説弓張月

瀧澤馬琴

三九

九月夜の西湖

河東碧梧桐

四四

二〇 待賢門の戦

(平治物語)

四七

練習

五二

二 平重盛論

高山樗牛

五九

年齢に関する熟語

六六

三 蘆花の「相摸灘の落日」

友枝照雄

六九

三 秋より冬へ(俳句)

七三

四 尺牘往來

七四

一 移轉の通知

尾崎紅葉

七四

二 同

夏目漱石

七五

三 盗難の通知

齋藤綠雨

七五

四 盗難の見舞

大町桂月

七五

五 招待の断

松尾芭蕉

七六

六 物を贈る

幸堂得知

七六

書簡文語

七七

五 樹の根

和辻哲郎

七七

六 日蓮上人

高山樗牛 八

新尼御前返事

日蓮 九〇

七 梅

野口米次郎 九二

八 元寇論

三宅雪嶺 一〇〇

九 いのりなほし

(吉野拾遺) 一〇九

一〇 柿山伏

(狂言記) 一二三

笑の文學

大町桂月 一二八

一一 土の匂

長塚節 一二九

一二 自然の愛好

藤岡作太郎 一三五

自然美と國文學

芳賀矢一 一三三

一三 正直であれ

吉田絃二郎 一三三

後篇

平家物語抄

一

平家物語に就いて(参考)

藤岡作太郎 一

一 祇園精舎の事

四

二 教訓の事

七

三 足摺の事

一七

四 有王島くだりの事

二三

五 月見の事

三四

六 實盛最期の事

三七

七 忠度都落の事	四
八 那須與一の事	四五
九 大原御幸の事	五〇



平泉 澄

福井縣の人、
歴史家、文學
博士、東京帝
國大學助教

北畠親房

吉野朝の忠
臣。正平九年
(約五七〇年
前)歿。年七十
三。

義良親王

後醍醐天皇の
第七皇子、後
御即位ありて
後村上天皇と
申す。

國語讀本 卷六

前篇

一 神皇正統記と北畠親房 平泉 澄

神皇正統記は、北畠親房が回天の計策を抱き、義良親王を奉じて奥州に下向せんとして、途中不思議の暴風に東西に吹分けられ、自らは常陸に漂着して悪戦苦闘するうち、後醍醐天皇の崩御に逢ひ、その御遺勅を畏み、ついで即位せられたる後村上天皇の爲に、帝王學の教科書として撰述し奉つたものといふべきである。彼は軍陣の間、一卷の文書を携へず、僅かに最も簡單なる皇代記を尋ね得

傾注
傾倒

て、それによつて時代を追ひつゝ、之を著はしたのであつた。これ決して單なる智識慾の満足の爲ではない。彼は劍を以て筆とし、血を以て墨とし、全生命を傾注して、この書を成したのである。字字に通ふものは彼の心臓の鼓動である。句々に躍るものは彼の壯烈なる意氣である。著者の全人格は、こゝに完全にその影を宿す。この書は實に親房の魂である、萬古不滅の魂である。

神皇正統記は後村上天皇の爲に著はしたものであるが、吉野朝廷の群臣は言ふまでもなく、常陸に於ける親房の従士も亦喜んで之を愛讀し、盛に軍陣の暇に傳寫したものらしい。實際、日に非なる天下の形勢を見て痛恨やる方なき將士にとつて、この堂々たる論述は、殆ど百萬の援兵を得た感があつたであらう。

然らばこの書の特徴は那邊にあるか。第一には、その題號の示すが如く、正統論の主張が一篇撰述の目的であり、又本書の骨髓で

確乎。
牢乎。

ある。親房はこれによつて、神皇正統の邪なるまじき理を申しのべて、素意の末をも顯さまほしくて記述したのであつて、足利尊氏が北朝を擁立し、恣に錦旗をかざすを見て、その妄を斥破し、吉野朝廷の主張に確乎不拔の根據を置き、不遇の間に安んじて正路を踏み、理想に邁進する力を與へんこしたものである。「今の御門また天照大神より以來の正統を受けまし、ぬれば、この御光に争ひ奉る者やあるべき。」といふのが、親房の確信である。而してこれが吉野の君臣にとつて如何ばかり心強く響いた事であらうか。吉野朝があゝの敗殘の劣勢を以て、極めたる困苦窮乏のうちに、よく半世紀を支へ得たのは、一にこの確信によるのであつた。

次に注意すべきは本書の發端である。「大日本は神國なり。天祖はじめて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此の事あり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」といふ書出

大鏡・水鏡・
増鏡 假名文にて書かれたる我國最初の歴史、合して三鏡といふ。作者未詳。

道は須臾も
「中庸」に出づ。

しである。これは上代の末から中世へかけての普通一般の歴史の書出しとは、全く類を異にしてゐる。上代末期から中世へかけての史書の類型的様式は、寺院に通夜して老人より昔語を聴くといふのである。大鏡然り、水鏡然り、増鏡然り。然るに神皇正統記が、この類型を破つて、直ちに「大日本は神國なり」と眞向から宣言したのは、夢幻の世界から現實の社會にかへり、ロマンチックの佛堂を出でて、理想主義の大旆の下に立つた事を示すものだ。

この書に於いて今一つ著しい事は正義の強調である。「この故に古の聖人、道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず」と説けり。但しその末を學びて源を明らめざれば、事にのぞみて覺えざる誤あり。その源といふは、心に一物を蓄へざるをいふ。しかも虚無の中にこゝまるべからず。天地あり、君臣あり。善惡の報影響の如し。己が欲をすて、人を利するを先として、境々に對する

隨處
隨時

こと、鏡の物を照すが如く、明々として迷はざらんを、眞の正道といふべきにや。といふが如き議論は、隨處に見えてゐる。すべて正しきものは最後の勝利を得る、道は遂に正路にかへる、といふのが親房の固い信念であつた。而してこれは當時を風靡してゐた實利主義に對する強き抗議であつたのである。

かくて神皇正統記は、純日本の魂により、建國の精神を復活し、神道の思想によつて佛説の惑溺を斥け、正義によつて實利主義を撃つ所の、強烈なる意志によつて一貫せられたる歴史である。而してこれこそ歴史の中に於いて最も典型的なる歴史である。この書は遠く建國當初の精神と照應し、當時にあつては能く吉野朝五十年の命脈を支へ、後世に於いては大日本史を起し、讀史餘論を起し、日本外史を起し、そしてやがて明治維新の大業を喚起し來つたのである。
(日本文學講座に據る)

大日本史
徳川光圀撰
讀史餘論
新井白石撰
日本外史
頼山陽撰

二 人臣の道

北 畠 親 房



北 畠 親 房

およそ王土に生まれて、忠をいたし命を棄つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、その迹を憫びて、賞せらるゝは、君の御政なり。下ごして、きは争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望を致すこと、みづから危むる端なれど、前車の轍を見ることは、誠にあり難き習なりけんかし。中頃までも、

前車の轍
前車後車戒
(漢書)

御代にや
(ありけん)

人の、さのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して、身を滅ぼし、家を失ふためしなれば、戒められしもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家に屬する事をごどむべし。といふ制符たびたびありき。源平久しく武をこりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて諸國の兵を召し具しけるに、近代ごなりて、やがてかたらはるゝ輩多くなりしによりて、この制符は下されしなり。果して、今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりけり。

郎從
郎黨

この頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家子郎從、節に死ぬるたくひもあれば、わが功におきては日本國

ぞ……める

言語は

言行君子之樞機、樞機之發榮辱之主也。

(易經)

堅き氷は「履、霜、堅、氷、至」
(易經)

堯
支那上古五帝の一。
許由、巢父

を賜はり、もしは半國を賜はることも足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝家の輕々しさもおし量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも、君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふと申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心の悪しくなり行くを、末世といはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の、國を傳へんごありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、こ

共に、支那古
代の隱者。

潁川

支那河南省。

などかゝ願
みざらん

まじ

の水をだにきたながりて渡らざりき。その人、五臟六腑のかはるにはあらじ。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。なほ、行末の人の心、思ひやるこそあさましかれ。大方おのれ一身は恩に誇ることも、萬人の怨を遺すべきことをば、なごか願みざらん。君は、萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人に頒たせ給はんことは、推しても量り奉るべし。もし一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつといふことも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶことも、千萬の人は喜ばじ。況や日本の半を心ざし、皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にもいだし、面にも羞づる色

將門 平氏、朱雀天皇の頃、下總猿島に據りて反す。

蕭何 高祖に仕へて常に軍の糧食を主る。後相國となる。

韓信

高祖に仕へて百戰常に勝つ。後高祖に忌まれて殺さる。

留 今江蘇省沛縣の東南。

のなきを、謀叛の始とはいふべきなり。將門が、比叡山に登りて大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にやありけん。昔は、人の正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲りけんを、今は、人々の心、かくのみなりにたれば、この世は愈衰へぬるにや。

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふぞ。中にも張良は、高祖これを師さして、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するは、この人なり。宣ひしかども更に、驕ることなくして、留といひて、すこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は

文治の頃 文治五年七月。約七四〇年前。

泰衡

藤原氏。秀衡の子。

平重忠

畠山氏。頼朝の功臣。頼朝

長岡の郡

今宮城縣遠田郡の内二三村を含む。

賢かりけるをのこにこそありけれ。

直實

熊谷氏。

身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡こそ極めたるすくなき所を望み賜はりけりぞ。これは、人に、ひろく、賞をも行はしめんがためにや、賢かりけるをのこにこそ。又、直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、日本第一の剛の者なり。と書きて賜ひてけり。一こそ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるが、褒美の詞の甚しきに、與へたる所の少き、まことに名を重くして利を軽くしける、いみじき事と、口々に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけん、いとを

かし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおこし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかこ、歎くともがらもありご聞えき。(神皇正統記)

三 御民われ

海犬養岡唐

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる時に逢へらく思へば

平野國臣

青雲のむかふす極みすめらぎの

みいづかゞやく御代になしてん

海犬養岡唐
萬葉集の歌人。傳未詳。

平野國臣
福岡の人、元治元年(約六十四年)歿。

天つ風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞおもふ國臣

梅田雲濱

名は源次郎、若狭小濱の人、安政五年(約七十四年)歿。

加藤千蔭

江戸の人、芳宜園と號す。歌人。文化五年(約一七五十四年)歿。

橋曙覽

福井の人、歌人、明治元年(約六〇年前)歿。

君が代を
おもふ心の
ひとすぢに
わが身あり
とも思はざり
けり

梅田雲濱

千萬のあたに向ひて走り猪の

加藤千蔭

かへりみせぬを心ともがな

橋曙覽

顯はさん御名はかけても及びなし

身の恥をだにのこさずもがな

1212
848
67845
671011
1411

春のはじめに古
事記を開きて先
春にあけて天
のほはじめの時
とよみいづる
かな 曙覽

小澤蘆庵

尾根に住む、
京都に生れ、
歌人。享和元
年(約一三〇
九)前。歿。年七

かすめる月かけ
る云に
雲もなくなき
たる空に影み
えてゆくとも
みえず 霞夜の
月 蘆庵

松平定信

樂翁と號す。
文政十二年
(約一〇〇二)年
前。歿。年七十

春のはじめに古
事記を開きて先
春にあけて天
のほはじめの時
とよみいづる
かな 曙覽

小澤蘆庵

ちゝはゝの旅なるわれを思ふらん

待つらんさまのおもかげに見ゆ

二月の月
かすめる月
かける云に
雲もなくなき
たる空に影み
えてゆくとも
みえず 霞夜の
月 蘆庵

松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの

まとおせし夜ぞこひしかりける

籠手のうへにふ
りしをしらで厚
衾かさねて夜は
の體をぞきく
樂翁

田安宗武

徳川三卿の
一祖。田安家の
始。祖。明和八
年(約一五〇
五)前。歿。年
五十七。

大國隆正

石見の人、も
と野々口氏、
國學者。明治
十四年歿。年八

伊藤左千夫

本名幸次郎。
千葉縣の人、
歌人。大正二
年歿。年五十

籠手のうへにふりしをしらで厚衾かさねて夜はの體をぞきく 樂翁

田安宗武

ちどりすら友よびかはし遊ぶなり

などてや人のひとりたのしむ

大國隆正

立てそむる志だにたゆまずば

龍のあぎとの玉も取るべし

伊藤左千夫

日の光くまなきかぎり人のゆく

正しき道はたゞひとつなり

國木田獨歩

名は哲夫、小説家、明治四十年、三十八年

武藏野

武藏國一帯の平原、平潤の數十里に亘る。

隨所
所在
到處

那須野

栃木縣にある曠野。

四 武藏野

國木田獨歩

武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。この路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美はたゞ縦横に通ずる數千條の路を、あてもなく歩くことに由つて始めて獲られる。春夏秋冬、朝晝夕夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此の路をぶら／＼歩いて、思ひつき次第に、右し左すれば、隨所に吾等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみ／＼感じて居る。武藏野を除いて、日本に此の様な處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。其の外何處にあるか。林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが、此の様に密接して居る處が何處にあるか。

されば、君若し一の小徑を歩き、忽ち三條に分れる處に出たならば、困るには及ばない、君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或は其の路が君を小さな林に導くかも知れない。迷はず行き給へ。林の中ごろに到つて又二つに分れたら、其の小なる路を選んで見給へ。或は其の路が君を妙な處に導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方に女郎花など咲いて居るといふ様な處だ。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら君の幸福である。すぐ引きかへして、左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて君の前に見わたしの廣い野が開ける。足もさから少しだら／＼下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が、日に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に脊の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集まつて居て、雲の色にまがひさ

地平線
水平線

そよ／＼
颯々
習々
嫋々

うな連山が、其の間に少しづつ見える。十月小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方へ下りて行くに、今まで見えた廣い景色が隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄み、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の畔には枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の畔の徑を暫く行くと、又二つに分れる。右に行けば林左に行けば坂。君は必ず坂を上るだらう。さかく武藏野を散歩するの、高い處高い處と選びたくなるのは、何さかして廣い眺望を得たいと求めるからで、それで其の望は容易に達せられない。見下す様な眺望は決して出て來ない。それは初からあきらめたがい。

若し君が、何かの必要で道を尋ねたく思はば、畑の中に居る農夫

慇懃
鄭重
丁寧

に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲を上げて尋ねて見給へ。驚いて此方に向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。大様に教へてくれるだらう。怒つてはならない。これが東京近在の若者の癖であるから。教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた道は餘りに小さくて少し變だと思つても、其のまゝに行給へ。突然農家の庭先に出るだらう。なほ變だと思つてはいかぬ。其の時農家でまた尋ねて見給へ。門を出るとすぐ往來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると果して見覚えのある往來だ。なるほどこれが近路だ。君はすぐ微笑をもらすに相違ない。其の時はじめて教へてくれた道の有難さがわかるだらう。

蒼空
碧落

落日
夕陽

眞直な路で兩側とも十分に黄葉した林が四五町も續く處に出る事がある。此の路を獨り靜かに歩むことの、どんなに樂しからう。右側の林の頂は夕陽鮮かに輝いて居る。をり／＼落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉落ちつくした頃ならば、跡は落葉に埋もれて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見すかされ、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない、愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、偶、一羽の山鳩のあわたゞしく飛去る羽音に驚かされる。

同じ路を引きかへして歸るは、愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困る事もあるまい。歸りも矢張あらまじに方角をきめて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると思はず、落日の美觀を獲る事がある。日は富士の背に落



四 武藏野

ちんとして未だ全く落ち
ず、富士の中腹に群がる雲
は黄金色に染みて、見るが
うちに様々の形に變ずる。
武 連山の頂は、白銀の鎖の様
藏 な雪が次第に遠く北に走
野 つて、終には暗澹たる雲の
風 うちに没してしまふ。
景 日は落ちる、野には風が

強く吹く、林は鳴る。武藏
野は暮れんとして寒さが
身に沁む。其の時は路を
急ぎ給へ。顧みて思はず

月を吹落す
（月）
（吹）
（散）
（か）
（荷）
（考）

山は暮れて
（谷口）
（蕪村）
（の）

新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。君は其の時、
山は暮れて野は黄昏の薄かな。
の名句を思ひ出すだらう。

露おかぬかたもありけり夕立の空よりひろき武蔵野の原

（太田道灌）

武蔵野は月の入るべき山もなし尾花が末にかゝる白雲

（源通方）

小島烏水

名は久太。紀行作家。

五 芒

小島 烏水

月桂樹が榮光の標章となつてゐる如く、橄欖の葉が平和

象徴

原始的
文化的

の幟牌となつてゐる如く、芒は土地の原始を象徴するものである。これといふ見どころのない、此の禾本科の一植物が、洪荒の宇宙を拓いて、そこに先づ自己が植民地を作り、それから後、人を呼んで、各人各時代の意匠にまかせて歴史を描かせ、自分はその歴史の中心から遠のいて、輪郭だけを作つてゐるやうに思はれる。

芒と連想して、何人も想ひ起すのは、武蔵野の原始的風光であらう。言ふまでもないが、東京市の前身なる江戸が、なほ殻中に包まれてゐた時の外皮は武蔵野で、武蔵野の全身に毛髪となつて被つてゐたものは芒であつた。

芒は平原を第一番に占領した主人である。芒の在るこ

關八州
關東八州。箱根以東、利根川系に屬する八箇國。
三浦・和田
三浦以下皆平家の支族。



ころに人間の原始あり創造がある。古今幾千歳、人類興亡の歴史が平原史であるとするれば、平原史の表紙に描くべきものは、先づ芒であることを忘れてはならない。殊に關八州の歴史は皆然りて、所謂阪東武者なる三浦・和田・秩父・北條・千葉・上總などの「いたづらツ兒」は、皆芒が吐き出した産物である。けれども芒は又同時に、衰亡

震慄
戰慄



常盤木
常綠樹



史にも終焉記にも伴ふことを加へておかねばならぬ。野晒しの鬮體のくぼんだ眼から、一二本芒が出てゐたり、廢寺の床から芒の穂のそよいでゐたりする光景は、吾人が幼少から震慄を以て迎へた畫題である。芒は零落性の秋を表し、秋の草を代表し、秋の草になへてありがちの寂しく悲しいといふ特徴を代表してゐる。萩があつても、女郎花があつても、ひこり芒がないと、秋にならない、秋の平原にはならない。秋の寂寥を磅礴みちたけさせない。常盤木の松があつても、柏が茂つてゐても、二三本の芒さへあれば秋になる、寂寥といふ感じを起させる。されば芭蕉は骸骨の能すする畫に「稻妻や顔のところが芒の穂」と題した。顴骨の高くなつた

意匠
工夫

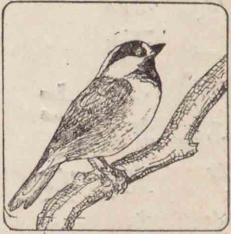
禿山に芒あり、雙頬の削り落された荒野に芒あり、總じて血色を失つた不毛の土地には芒を見るものである。

かういふ芒は「廢亡」や「零落」や「絶滅」にゆく戸牖の飾として、自然が意匠したシムボルのやうである。墓前の櫓の如くに！ 嗚呼ばうくとして、針の如く尖り、刃の如く冷たき芒よ。爾は諸の不祥を包藏する大藪林なるか、さらば余は爾を忌まねばならぬ。げに芒が一本ぬツと立つてゐるところは、亡國を豫言する老巫女のやうに氣味がわるい。要するに芒は土地の「原始」を潤色し、又併せて人間の「終局」を修正する役を有する一種の標章的植物である。

(山水美論)

潤色
脚色

薄田泣菫
名は淳介、
山縣の人、
學者、文岡



六山雀

薄田泣菫

鳥啼く、柿の實紅をさして、夕日に浴びたる上枝高く、

首ふる、尾をふる、興に入りて、

歌ふよ、山雀、律も優に。

秋蟬、今日より峯を下りて、

麓の林に木の實盛れよ、

ゆふげのかへるさ道を遠み

翼の倦まぬも不憫なるに。

遠き故に

道ゆく旅人こゝに來り、
（舟人のりと赤くはつて美し）
赤丹の穂に見る額もあげず、

きてなほ肩の荷解かであらば、

野守よ、行くての路を貸すな。」

妙なる歌にもうとき耳は、

よき子の頭におかるべしや。（暮笛集）

七 空ゆく雁

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「い

新玉の年
養和元年（約
七五〇年前）

一萬、箱王
平祐隆

祐家
祐繼

祐親
祐泰

祐成（二萬）
時致（箱王）
祐經

母

名は滿江。祐泰の死後、曾我に再嫁す。
曾我殿
太郎祐信。

工藤一藹

祐經。建久四年（約七三〇年前）曾我兄弟に討たる。

この里

相模國足柄下郡曾我中村。

かに母御前。父は、いつこにおはしますぞや。その佛は、何國にましますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ。「こいひければ、遙かに忘れたるこし方も、今更思ひ出されて、消え入るばかりに思はれて、母泣くく、宣ひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。箱王、重ねて申しけるは、「父御前は、まここやらん、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藹とやらんに射られ、死に給ひぬ。」と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんごや思ふらん。我等がこの里に在りご知らで

や過ぐらん。など、お
こなしく語りけれ
ば、母よりはじめて
女房達まで皆袖を
ぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、

秋も闌け、九月十三

夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人、庭に出でて遊びあたる
に、五つ連れたる雁がねの、南をさして飛びけるを見て、一萬
申しけるは、あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶつばさも、皆別の
翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一



る見を雁飛弟兄我會

雁が音
垣根

河津殿
袖奉。
だに
すら
さへ

さめく
潜々
潜然

つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物いはぬ鳥類すら
かくの如し。我等は人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄
母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬ
こそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとか
や。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも
持ちて、今ぞ思ふやうに、物を射ありきなん。我等より幼き
者にても、馬鞍弓矢をもて、物を射ありくことの羨しさよ。
これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は、父御前の戀
しくおはしますぞや。さて、袖に顔をさし入れてさめく、こ
泣きければ、弟も、こさかしく、顔をあはせて、泣き居たり。一
萬の乳母の女房、これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞

こそ聞け

け。いかに和上臈達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。こくく入らせ給へ。と、怖しげにいひければ、二人のものは、門外へ逃出でて、思ふやうに、飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

或時兄弟は、竹の小弓に、薄矧うすきりの小矢を取り添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立ち向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如くさしあひて射取りて、ごにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給

明障子
障子

實か一議し
あふなるは

伊東入道
祐親。
千鶴御前
母は祐親の
女。
松川が淵
伊豆國田方郡
伊東にあり。
左衛門尉
祐經。

へ。われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。こいひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと、人々思ひけり。

一萬が乳母、この由を聞き知りて、大いに驚きて、母にかくご申しければ、母も大きに仰天し、二人の子どもを呼寄せ、泣く泣く語られけるは、實か、おのれ等が、さも怖ろしき謀叛を起さんと議しあふなるは。もし人の耳に入りなば、よかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を、松川が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かかる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。

石橋山の戦
治承四年八月
なり。約七五
〇年前。石橋
山は相模國足
柄下郡にあ
り。
土肥の杉山
同郡土肥の山
谷、石橋山の
南にあり。
梶原景時
頼朝の重臣。

況や—あ
てをや

その時千度百度悲しむこともかなふべきか。その上、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してござまりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人、心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を、皆返しまゐらせて、「二人の幼き者どもを助けて給はらん」と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ。」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて、今まで希有の命を保ちたるぞ。それに就きて、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にて、思を知るこそ聞け。況や汝等人倫においてをや。然

目と目とを
見あはせ

曾我物語

曾我兄弟仇討
の始末を記
す。十卷あり、
作者不詳。

るを却つて曾我殿に歎を與へんこと返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思は、速かに謀叛をこむべし。口説きたて、誠められければ、二人の子ども目と目とを見あはせ、顔うち赤めて立ちにけり。それより後は、人の聞かぬところにては、内々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も内々怖ろしき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば、出家にせんこそ思はれける。(曾我物語)

夜があけて狩場々々へ外科を呼び

祐經は蟲のいきにて五寸抜き

五郎丸ふわりとぬいでしがみつき（川柳）

八 白峰の陵

上田 秋成

上田秋成 大阪の人、和學者、文化七年（約一七〇八年）歿。年七十八。

相阪關 滋賀縣滋賀郡にありき。

鳴海潟 愛知縣愛知郡。今は全く陸地となる。

浮島が原 靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野。

鹽竈 宮城縣宮城郡にあり。

象潟 秋田縣由利郡象潟町附近の海岸。

相阪の關守に許されてより、秋來し山のもみち葉見すこし難く、濱千鳥のあと蹈みつくる鳴海潟、富士の高根の煙、浮島ヶ原、清見が關、大磯、小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和きたる朝げしき、象潟の蟹が苫屋、佐野の舟橋、木曾のかけ橋、心のこゝまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葎がちる難波を経て、須磨、明石の浦吹く風を身にしめつゝも、行きくゞて、讚岐の眞尾坂の林こいふに暫く筇をこゝむ。草枕遙けき旅路のいたはり

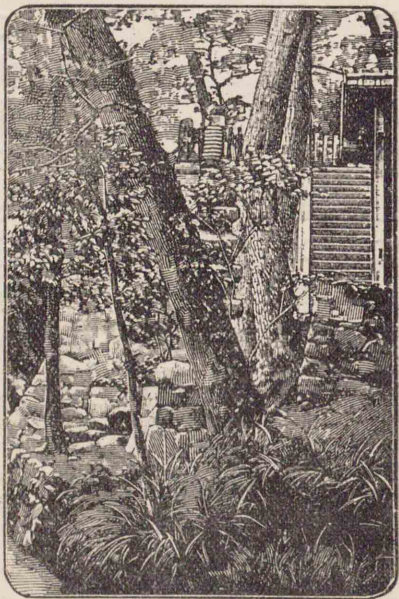
佐野の舟橋 群馬縣羣馬郡佐野村烏川の渡。

仁安三年 高倉天皇の時（約七六〇年前）

白峰 香川縣綾歌郡松山村。

新院 崇徳上皇。

こそ…あれ



なき心ちせらる。

木立わづかにすきたる所に、土高く積みたるが上に、石を

白峰の陵 御 日すら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽こいふ險しき嶺、後に峙ちて、千仞の谷底より雲霧おひ上れば、まのあたりも覺束

三かさねに疊みなしたるが、うばらかつらに埋もれてうら
悲しきを、これなん陵よご思へば、心もかきくらまされて、更
に夢現とも分きがたし。

げにまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に大政き
こしめされ給ふを、百のつかさ人はは、かく賢き君ぞこて、御言
かしこみて仕へまつりき。近衛院に譲りましし後も、藐姑
射の山の玉の林をしめさせ給ひしに、思ひきや、麋鹿ヒツの通ふ
路のみ見えて、まうづる人もなき深山のおどろの下に、神が
くれ給はんさは。萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の
業ごいふもののおそろしくも添ひたてまつりて、罪をのが
れさせ給はざりしよご、世のはかなきに思ひつゝけて、涙わ

藐姑射の山

射山

仙洞

霞の洞

思ひきや
—とは

夜もすがら
日ねもす

き出づるが如し。夜もすがら供養し奉らばやご、陵の前の
平なる石の上に座を占めて、經文靜かに誦しつゝも、かつ歌
詠みてたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを

かたなく君はなりましにけり

尙こゝろ怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけん。
日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の床、木の葉
の衾いごさむく、神清み、骨冷えて、物ごはなしにすさまじき
心ちせらる。(雨月物語)

雨月物語
上田秋成の
著。小説様の
物語九篇を収
む。
爲朝
鎮西八郎爲
朝

折しもさし入る月光に、爲朝御廟の柱を見上ぐれば、二首の歌

を書き、仁安三年十月日圓位とあり。さては西行法師も、去々年の冬こゝへは参りけんこ領きつゝ、石の玉垣の斜なる扉を押開きて蹲踞し、さて申すやう、君、十善萬乗の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かし給ひしも、今は懷土望郷の魂、玉體を南海の俗に混ず。露を拂つて御跡を尋ね奉れば、秋草泣いて涙を灑ぎ、嵐に向つて君が墓を問へば、老檜悲しんで心を傷ましむ。佛儀は見えずして、たゞ朝雲夕月を見る。法音は聞えずして、たゞ松響鳥語を聞く。軒傾きては曉風寒く、夢破れては夜雨防ぎ難し。昔今の御有様いと痛はしくも、淺ましく思ひ奉れど、微臣が孤忠を述ぶるに由なく、既に力竭き勢窮まりて、今生の誠忠を訴へ後世の苦樂を共にし奉り、君につれなかりける者ごもを、悉く取り殺さばやと思ふのみ。圖らずも大島を逃れ來て、尊靈を驚かし奉るものなり。と申し果て、涙を潸然と落しつゝ、やがて氷なす短刀

大島
伊豆。爲朝の流されし島。

を抜いて、腹に突き立てんとするに、怪しきかな、手足忽ちにしびれて如何ともすべなし。
(椿説弓張月―瀧澤馬琴)

椿説弓張月
鎮西八郎爲朝の一生を描ける小説。三十卷、馬琴の著。

河東碧梧桐

名は兼五郎、愛媛縣の人、俳人。

杭州

支那浙江省杭州府

吳山

杭州府の東南に聳ゆ。

錢塘江

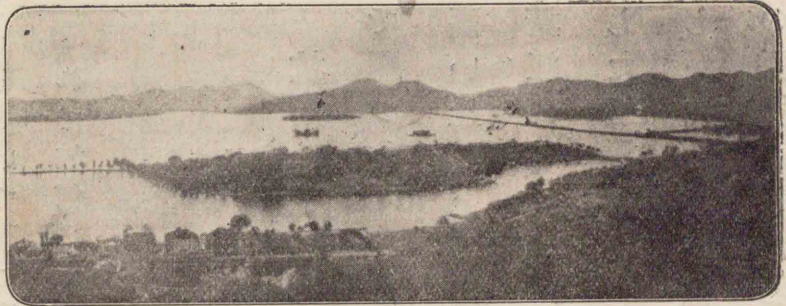
杭州府を過ぎ、杭州灣に注ぐ。

九月夜の西湖

河東碧梧桐

杭州に下車して晝飯を済して後、すぐ洋車を吳山の麓まで驅つた。きたない狭い民家の間から上り始めて少し高い丘の上に出るこ、そこに杭州城を半圓に遠く卷いた錢塘江の眺望があつた。風も吹かないので、爽快な、すつきりした氣持になつて、始めて足下にたゞ白壁を塗り重ねたごしか見えない杭州城内の建築ご、吳山の一角の出張つた山の磊塊ごした岩石ごの配合が、錢塘江の水を待つて、一幅の

雷峰塔
華日峯の湖中
に突出したる
小高き處にあ
る塔。
逢着・撞着・祝着



西湖

男性的な油繪になる構圖に興を催すのであつた。日本から渡つた鐘を吊つてゐる寺や、四五臺の轎子に釣られて來た身分のありさうな女連れの寺の寺參りなどを見ながら、なほ四五町も上るに、今度は右に雷峰塔と西湖の東南の一部を見おろす眺望に逢着した。西湖の中には大小二つの島がある。それが正しい圓さである上に、葉の茂つた柳でぐるつと水を區切つてゐる。ぼうと霞んだ、靜かに湛へた水に、しだ

林和靖
名は道、宋の
高士。
岳飛廟
宋の忠臣岳飛
を祀れる廟。

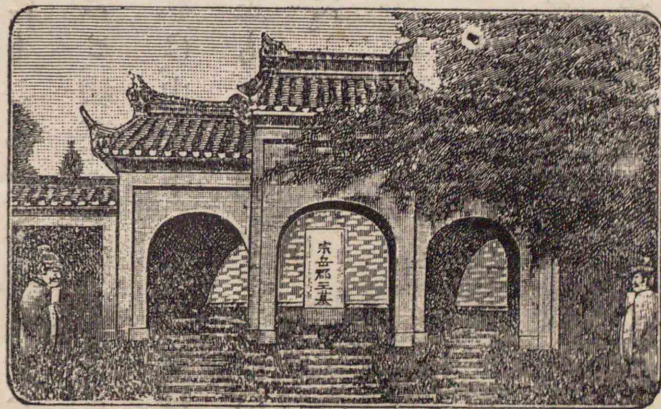


全景

れた柳が落着いた柔かな味を添へてゐる。支那にもこんなまごまつた景色があるのだと、物憂ささだるささから目覺めた私は、山を下りてから、城内をぶらつく足もとも明るく力づいたものになつた。
兎も角も日のある中に出来るだけの遊覽をしようといふので、旅館前からすぐ小舟を浮べさせて、林和靖の故跡の放鶴亭や、岳飛廟をめぐつた。舟はやつと四人までしか載せられない

青史 汗青

いボートの舳艫の詰つたものだ。船夫は大きな杓子のやうな權を執つて船尾に腰掛けて操縦する。日覆の白い布は船の長さに張られて、四人の座席は籐椅子で手輕に組立て、ある。青史を血に染めた悲壯な事實も、高風の萬世に仰がれる隱逸の傳説も、今の支那では遺憾ながら何の感興も惹かない。故跡の外形は殘存してゐても、故跡の情味は疾くに泥土に委してゐる。放鶴亭・岳飛廟・岳飛の墓、それらの



岳飛墓

高風 英風

過去の史傳の傳へた強烈な感興と、現在の古跡の示す落莫たる光景の餘りにかけ離れた相違、それを仔細に觀てゐるには堪へられなくなる。果ては今昔の感心でもいふものか、うら悲しく、涙ぐましくなる。それよりも此の一葉の舟を湖中に浮べて滑かな水の上を何處を指すともなく漂つてゐる方が、せめてもの林和靖の高風を今に實現する詩的感興を喚ぶのだ。實際湖中に漂つてゐると、氣は澄み胸は豁ける。支那漫遊の外客といふやうな氣分も、或はこの大陸の興亡の瀬戸際といふやうな心持も、總べて忘れられて洗ひ落されて、たゞこの自然と我が融會してしまふやうな氣がする。馬鹿にいゝ氣持になつて、日のくれに宿

東坡堤
元祐年中、蘇東坡の造れる堤。

清風徐來
蘇東坡の前赤壁賦の句。
月明星稀
魏の曹操の短歌行に「月明星稀鳥鵲南飛云々」

に歸つて來た。

夜に入るに珍しくいゝ月だ。私たちは晝間の扁舟に坐して東坡堤の水門を潜つて、ひろくとした湖面に出た。晝間は彼方此方に白い日覆が、さも鷗でも浮んでゐるかのやうに往來してゐたが、今はどう見通しても舟らしい影は目に入らない。たゞ東岸に立ち並んだ旅宿の燈が漁火のそののやうに水にきらついてゐるのみであつた。「清風徐來、水波不起。」とか、「月明星稀。」とかいふやうな文字は、たゞさういふ文字として目に映ずるが、その文字の齎す詩人の胸裏には突入し得ない。それも今日の支那の國情では已むを得ない、自然であるかも知れないと、舟中の外客二人は妙

鳥鵲南に飛ぶ
魏の曹操の短歌行に出づ（前頁参照）

に大人びた氣になつて、この清風明月を我が物顔に振舞つてゐた。

兎も角も、船首を東岸の方に向けた。鳥鵲南に飛ぶと言つたやうな夜空が、しいんとして、飽くまで靜かさを押しつけてゐる。くつきりした西の山なみは、晝間よりも、ずつとあざじさりしたものゝやうに、我等からかけ離れてしまつた。尊い淋しさが折ふしの漣に連れて、ひし／＼と私たちの胸にしみ込むのであつた。（支那に遊びて）

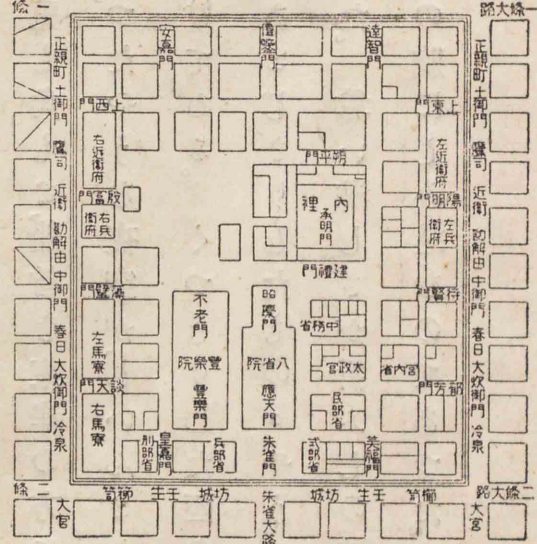
三文字

一〇 待賢門の戰

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の

樊噲 漢の高祖の臣、勇猛の士。
張良 漢の高祖の臣、智謀の士。

直垂に櫛勾の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、滋藤の弓持つて、黃桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲、張良が勇をなさざらん。とて、三千餘騎を三手に分つて、近衛中御門、大炊御門、大宮表へ打出で、陽明待賢、郁芳門へ押寄せたり。



大内裏圖

大内には南西北の三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ごも多く引立てたり。梅壺桐壺紫宸殿の前後まで兵ひしこなみ居たり。皆源氏勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流差しあげて、勇み進める三千餘騎一度に関をぎつと作りければ、大内も響き渡つて夥し。

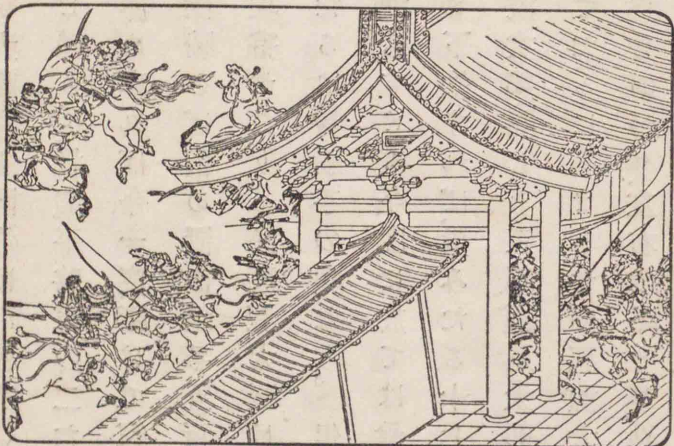
左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信賴卿と見るは儼目か。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛生年二十三」と名のりかけければ、信賴返事にも及ばず、それ防げ侍ごも。とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、われ先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけ

たり。義朝之を見て「悪源太はなきか。信頼といふ大臆病人が待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅けられたり。續く兵には鎌田兵衛後藤兵衛佐々木源三波多野次郎三浦荒次郎須藤刑部長井齋藤別當岡部六彌太猪俣小平六熊谷次郎平山武者所金子十郎足立右馬允上總介八郎關次郎片桐小八郎大夫以上十七騎轡を雙べて馳向ふ。

大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉悪源太義平と申す者なり。生年十五歳武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしより此の方度々の合戦に一度も不覺の名を取らず。年つもつて十九歳。見參せん。」とて、五百騎の眞中に割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎様横様十文字に敵をさつと蹴ちらして、「端武者ごもに目な懸けそ、大將軍を組んで

大藏
武藏國比企郡
菅谷村の大
字。

目な懸けそ。



揉うだり

騎叶はじこや思ひけん、大宮表へさつと引く。

撃て。櫓の匂の鎧に蝶の裾金物打つて黄桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押並べて組んで落ち手捕りにせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ごも、與三左衛門新藤左衛門を始として百騎ばかりが、中にぞ隔りける。悪源太を始として十七騎の兵ごも、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木の中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん組まんこぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘

筑後守
平家貞
平將軍
平貞盛

掠掠

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つご参りて、曩祖平將軍の二たび生れ替り給へる君かな。ご向ふ様に譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんごや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の掠の木まで攻寄せたり。又惡源太駈け向ひ見まはしていひけるは、只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすごも今度に於ては餘すまじ。押並べて組んで捕れ、兵ごも。ご下知すれば、勇みたる十七騎われさきにご進みければ、今度は難波次郎同じき三郎瀬尾太郎伊藤武者を始として百餘騎が、中に隔てたるに事ごもせず、惡源太、弓をば小脇に搔いはさみ、鎧踏張り突立ちあがり、左右の手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり、敵には誰か嫌はん、寄れや、組まん。ごいふ儘に、先のごこ

組みぬべうもなし。

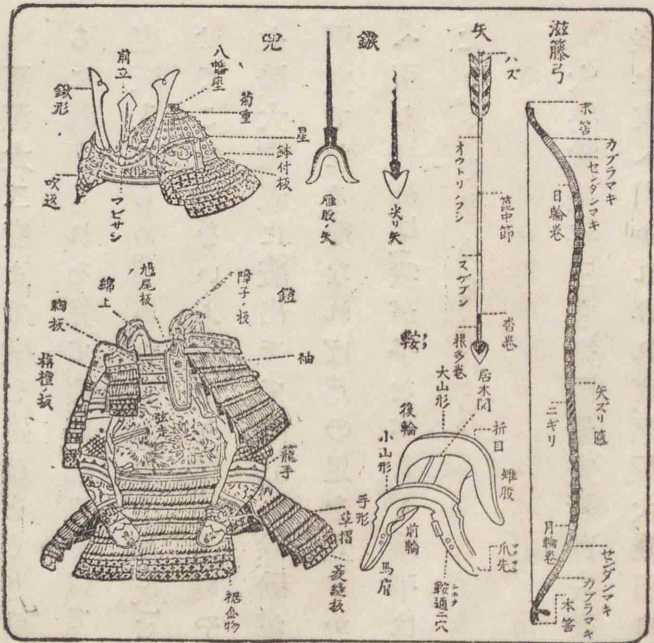
須藤瀧口
瀧口は職名。禁中の警衛を掌る。

面も振らず
眞一文字にまつしぐらに

く大庭の掠の木の下に追廻して五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵度駈入るらめ。あれ速かに追出せ。ごいひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、承り候。進めや、ものごも。ごて色も替らぬ十七騎大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平はよく駈けたるかな。あ、駈けたり。ごぞ譽められける。

大將重盛與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主從三騎かけ放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつご目合せて、爰に落つる

こそ…見れ



武具の圖

よつ引いて
つてつがひ、よつ引いてひやうと射る。重盛の射向の袖にはたこ
中りて飛びかへる。やがて二の矢を射たりければ、押附にちよう

は大将ごころ見れ。返
せや。こて追つかけたり。
既に堀川にて追つつめ
けるが、弓手の方に材木
多く充ち満ちたるに、悪
源太の乗り給へる馬か
たなづけの駒にて、材木
にや驚きけん、馬手の方
へ蹶飛んで、小膝を折つ
てごうと伏す。鎌田兵
衛延ばさじこ、十三束取

ござんなれ
こそおのれ

堀川
大内裏の東、
洞院通と大宮
通との間。

紀信
漢の高祖、榮
陽(河南省開
封府の南)に
於て事急なり
し時、紀信身
代りとなりて
之を救へり。

ご中りて、籠かつぎ碎けて跳り返れり。悪源太、これは聞ゆる唐皮
ごいふ鎧ござんなれ。馬を射て、落ちん所を撃て。ご下知せられけ
れば、又よつ引いて、追ひ様に筈の隠る、程射込みたり。馬は屏風
を返す如く倒るれば、材木のうへに跳落され、兜も落ちて大童にな
りたまふ。鎌田、堀川を馳越えて、重盛に組まんご落ちあふ。重盛
近づけては、叶はじごや思はれけん、弓の弾にて鎌田が兜の鉢をち
ようご突く。突かれてゆらゆる間に、兜を取つて打着つ、緒を強
くこそ締められけれ。與三左衛門馳寄つて中に隔り申しけるは、
「漢の紀信は高祖の命に代りて、榮陽の圍を出だし、終に天下を保た
せき。主辱しめらるゝ時は、臣死すごいふに非ずや。景安爰に在
り、寄れや、組まん。」ごいふ儘に、鎌田兵衛ご引組んで取つて押へける
所に、悪源太、馬引起し、之も堀川を馳越えて、重盛に組まんご飛んで
懸りけるが、鎌田をや助くる、大将をや撃たんご思案しけれごも、大

將には又も寄せ合ふべし、政家を撃たせては叶はじ、とおもひ、與三左衛門に落合うて三刀刺して首を取る。重盛は頼み切つたる景安撃たせて、命生きて何かせんとして、すでに悪源太と組まんこせられけるを、進藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん處にてこそ大將の御命をば捨て給ふべけれ。さて、我が馬を引きむけ、中に隔てて悪源太とむずこ組む。政家は重盛に組まんこしけるが、主を撃たせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落重つて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。(平治物語)

平治物語
平治の亂の戦
記物語の作者
未詳

爰に落つるは大將ごころを見れ返せや。

鎌田、堀川を馳越えて重盛に組まんこ落合ふ。

悪源太、弓をば小脇に搔いはさみ。

政家、進藤に、落重つて首を搔く。

大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。

之をしるしにて、腰なる脇指を抜きて引きけり。

高山樗牛

名は林次郎。山形縣の人。文學博士。明治三十五年、明

重盛

平清盛の長子。内大臣。小松殿と云ふ。治承三年(約七五〇)に、四年(約七五三)に、四十二(約七九四)に、

一一 平重盛論

高山樗牛



小松内府重盛は、げに智仁勇

兼備の大臣なりき。たゞその

理に明らかなるに較ぶれば、そ

の意は寧ろ弱く、その情は寧ろ

脆かりき。彼がその材能を發

揮して遺憾なからんがためには、少くとも更に數層の強烈

なる意志を要すべかりしなり。加ふるに早く佛説に歸依して現世の無常を觀ぜしがために、奉公の大義大事務に於て聊か缺くるごころあるを免れず。この人にしてこの弊あり、洵に惜しむべし。

四十二年の齡は、重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや、彼實にその樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實にその柱石たり。彼の一生は、その父入道ごごもに平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に情強く、眞に一世の豪傑なりしかど、その事をなすに當りて、重盛に待たざるごご殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては、籌を百里の外に運らし、

樞軸
柱石

世靜まれば儀禮彼に於て備はり、道衰ふれば大義かれによりて正されき。彼はたゞに平家一門の柱石たりしのみならず、また世道の儀表たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、而して重盛は實にその人傑の第一人なりき。

惡源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は、いかに勇まかりしよ。彼武藝に於て人後に落つるものにあらざりき。信賴平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありてこれを聞きし清盛を始め平家の一族は、寧ろ西國に走りて再舉を圖らんご欲したりき。かの時平家にして直ちに都に歸らざりせば、天下のごご未だ俄かに知るべか

義平 源義朝の長子、平治元年(約七七〇年)前、歿、年二十。
信賴 藤原氏。平治元年(約七七〇年)前、歿、年七。

開山
開祖

資盛
重盛の次子。
この時伊勢國
に逐はる。

らざるなり。臣民の義理、臣民の方言。この時に當りて衆論を排して入京を主張し、大義名分を唱へて士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の戦功を論ずれば、當に功一級たるべきもの實に重盛なり。たゞこの一勝によりて、今や平家はさながら旭日昇天の勢ありき。さればこの氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山（開祖）とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄、入道が掌裏にあり。重盛が天分益（上皇）、その高きを加へぬ。今や彼は一武弁にあらざりて、朝廷の輔弼（たすけ）たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨（わきま）ずべきもの、實に彼を措いてその人なかりき。その男資盛、攝政の儀仗を冒して辱められし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讐を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られんごせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを説破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の擧に出でんごするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしものまた重盛なりき。入道が我執の一念は幾度かこれがために沮まれて、君國のこごために僅かに安らけ

攝政
藤原基房。
鹿が谷
比叡山の麓にあり。

私門
公家

四恩
天地の恩、國
王の恩、父母
の恩、衆生の
恩、一説には、
父母の恩、師
長の恩、國主
の恩、施主の
恩ともいふ。



平重盛

きを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事なきを謀れる重盛が心事のいかばかり苦しかりしかは、察する

に餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大窮まりなかりしが、その裏面にはその愛子を犠牲とせる慘憺たる悲劇ありき。

際遇
際會

重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛説に歸依して來世を希求せしもの、その際遇の自ら然らしめしところ、その情や深く憐むべしとせん。
然れどもこの佛説に歸依せることは、重盛にこりて寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼、身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずべきもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情

時局

何ぞ…少き
や

さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。この難關に當りてよく効を擧ぐるもの、眞に人傑といふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局ヨケルを回避して、自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死してその末路に遭はざらんといふにあり。何ぞその願の私情に拘ること多くして、公義に盡すことの少きや。彼の一身は公私内外の望の由つて繋るころ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば、入道が横暴はさながら悍馬の御に離れしが如くならん、

こそ……ね

は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて塵かば、天下靡然
として従はん。と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、
また以て想ふべきにあらずや。あはれ、世はいかにもなり
なん。たゞ力を盡し忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かね
て亡き身のせんすべなからめや。さるを君父を捨て一門
を捨て、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾
人こそ、に至りて遂に重盛を辯護するの辭を知らざるなり。

(樗牛全集)

志學 而立 不惑 知命 耳順 還曆
古稀 喜字の齡 米壽の祝

友枝照雄
東京外國語學
校教授

一二 蘆花の「相摸灘の落日」 友枝 照雄

秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に
落つる日を望むに、世に斯かる平和のまた多かるべしとは
思はれず。

冒頭の一段は強い表現である。一讀已に吾人は別天地の門
戸をうかゞふの感がある。「世にかゝる平和の云々」の結句によ
つて、吾人は自然に興味をそゝられ、進んで平和の殿堂の内陣ま
で進まうとする要求を生じて来る。けれど「立つて」このみあつ
て、その場所が示されてない。これは後段に至つて始めて理解
される手法になつてゐる。これにも讀者になほ一步進ませよ
うとする力がある。特に注意すべき點である。

日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み終るまで、三分

進まう

爛々
炳焉
煥然
細うせる



相摸灘に見たる夕日の不二

時を要す。
初日の西に傾くや、富士を
始め、相豆の連山は煙の如く
薄し。日はいはゆる白日、白
光爛々として眩しきに、山も
眼を細うせるにや。
日更に傾くや、富士を始め
相豆の連山次第に紫になる
なり。日更に傾くや、富士を
始め、相豆の連山紫の肌に金
煙を帯ぶ。

逗子
神奈川県三浦
郡の海濱にあ
る町

臨終
終焉

この時、濱に立つて望めば、落日海に流れて、我が足下に到
り、海上の舟は皆金色を放ち、逗子の濱一帯山といはず、砂こ
いはず、家こいはず、松こいはず、人こいはず、轉がりたる生簀
の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。
かゝる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待す
るの感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉
融け、靈獨り、端然として永遠の濱に亘むを覺ゆ。
物あり、融然として心に沁む。喜びこいはんは過ぎ、哀し
みこいはんは未だ及ばず。

この段は三段に小分することが出来る。第一小段は初めか
ら「金煙を帯ぶ」までで、遠景の描寫である。伊豆の山に刻一刻落

ちて行く夕陽のさまを極めて印象的に叙してゐる。はじめ、日の西に傾くやと云ひ次に「日更に傾くや」と云ひ最後に「日更に傾くや」と云ふのに、落日に伴ひ、時間的に變つて行く自然の色彩美を味はせると共に、吾人の心をどこまでもそつて行く。「山も眼を細うせるにや」は特に印象深い表現である。第二小段は「この時」から「燃えざるはなし」までであつて、近景の描寫である。そして作者自身も赫焉として燃えてゐるもの一つであることが暗示されてゐる。こゝに第三小段における「凡夫も靈光に包まれ肉融け云々」の伏筆を見ることが出来る。第三小段は「かゝる」から最後までであつて、自然の精神に没入してその神秘感を叙してゐる。殊に「大聖の臨終」といふ比喻は、全篇の調子を高めると同時に讀者に襟を正させる力がある。

既にして、日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ち

に印度藍色に變ず。唯富士の巔舊によつて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み始めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分別れ行く世をば顧みがちに、悠々として落ちゆく。

既にして残り一分となり、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘖せて點となり、忽ちにして無し。

眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。しかも餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後實に斯くの如し。

この段は二小段に分れる。第一小段は「既にして」から「忽にしてなし」までである。作者得意の筆が愈々すくなくなつて、落日の最後の一瞬時における光景を、微に入り細を極め、まぎ／＼と目に見るやうに描いてゐる。第二小段は「眼をあぐれば」から終りまでである。こゝに落日の餘光を説きて偉人を呼起し、讀者をして偉大な人格の力を自然に思はしめる。

日の落ちたる後は富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱こなり、燻りたる樺こなり、上りては濃き藍色こなり、日の遺蘂ゲツこも思はるる明星の、次第に暮れゆく相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

(自然と人生)

この段は吾人をして暗黒のうちに光明をみごめさせる。明

星を日の遺蘂こよび、かつは明日の日出を約してゐるやうに見るところに、永遠を思ひ永遠を追うてゐる作者の面影も彷彿する。(國文新講)

一三 秋より冬へ

屋根葺のこみ掃き落す芭蕉かな	子規
しぐるゝやいつまで赤き鳥うり	子規
すちかひにさゝ波雲や盆の月	青々
足だかな嗽ひだらひや雁來紅	句佛
桐一葉踏みて立ちゐる巡查かな	たけし
裏沼のあぐるしぶきや野分垣	秋櫻子
二君にはつかへ申さぬ紙衣 <small>カミ</small> かな	鳴雪

青々 松瀬氏。
句佛 大谷光演。
たけし 池内洗。
秋櫻子 水原豊。

鬼城
村上莊太郎。

虚子
高濱清。

碧梧桐
河東乘五郎。

お机に金欄かけし十夜かな

鬼城

すみぐりの掃除届きて冬ごもり

虚子

地江りのごきの瀧水や冬木立

碧梧桐

一四 尺牘往來

本日芝新堀町二十五榊島方に引きうつり申候退隱靜養の
心底に候間他へは御もらし下さるまじく願上候

梅の道白玉樓も遠からず

尾崎紅葉

尾崎紅葉
東京の人、名
は徳太郎、小
説家、明治三
十六年歿、年
三十六。
表面の處
熊本市北千反
畑。

御書拜見近頃は發句廢業駄句も何も皆無に候今般表面の
處へ轉寓致候間一寸御傳へ申上候

鶯もやなぎも青き住居かな

菜の花の隣ありけり竹の垣

夏目漱石

夏目漱石
東京の人、名
は金之助、文
學者、大正五
年歿、年五十。

駄作御間に合ひ候や否や一昨夜賊來りて例の着物と例の
羽織とそれに帯をも添へて持去り申候こゝも浮世の濱な

れば白浪の立ちさわぎ候も是非なく候へどもさりとは都

忘れんとするに夢の安からぬ次第に候惡銭身につかずと

は斯様の時に申す事とも覺えず御笑までに御知らせ申上

候勿々 鵜沼より

齋藤綠雨

鵜沼
神奈川縣高座
郡の海岸にあ
る別荘地。
齋藤綠雨
名は賢、小説
家、明治三十
七年歿、年三
十八。

盜難は承諾せざる寄附なり寄附は承諾せる盜難なりと言
ひし人もありとか圖らざりき貴君がその承諾せざる寄附
を出し給はんとは現に貴君が實地に經驗せられて見れば

大町桂月

土佐の人、名は芳衛、文學者。大正十四年歿、年五十七。

そのやうなのんきな事もいつてをられず御氣の毒千萬に存じ候へども考へ直して見れば矢張承諾せざる寄附なりと諦め給ふの外なし御見舞やら何やらわからず候へどもこれが小生の御見舞に候

大町桂月

夕飯にはあづき飯と承りたのしみに致居候ところへ元山より蕎麥と申越候間あづきは明日と草々

松尾芭蕉

伊賀の人、俳句の大家。元禄七年(約二一三〇年前)歿、年五十三。

松尾芭蕉

ゆばの味噌漬

このまゝ箸にて味噌の玉を拂ひ遠火にあぶり油の煮えあたままりたるところを度として御あがりなさるべく蕉げては面白からず右御覽に入れ候

幸堂得知

幸堂得知

本名鈴木利平、東京の人、大正十二年歿、年七十二。

匆々 草々 不一 不悉 不備 不宣 頓首
拜具 敬具 謹言 恐々 再拜 恐惶謹言

一五 樹の根

和辻哲郎

和辻哲郎
兵庫縣の人、京都帝國大學助教授。

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、長い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつこりと落着いた、潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらし

しをらしい

い色艶を増してくる。雨のあとで太陽が輝きだすと、早朝のやうな爽やかな気分が、樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感じられる。をりふしかはいゝ小鳥の群が、いきゝした聲で囀り交はして、緑の葉の間を樂しさうに往き來する。それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇んで、砂の中にくひこんだ複雑な根を見まもるここができた。地上と地下との姿が、何とひどく相違してゐるここだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べて地下の根は、戦ひ、もが

複
雜
簡
單

き、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに枝から枝と分れて、亂れた女の髪 of 如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかし、それを目の前にまざくゝ見た時には、思はず驚異の感に打たれぬわけには行かなかつた。私は長い馴染の間に、このやうな地下の苦しみが、不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じた事がなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しきやうな顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が、一月以上も續いた後であつた。しかし、その叫び聲や、萎

可能
可能性

れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に返つて、苦しみの痕をめつたにあこに遣さない。しかも彼等は私たちの眼に秘められた地下の營みを、一日も怠つたところがないのであつた。あの美しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼等は私どもと共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐることだが、私には新しい事實さしか思はれなかつた。

◇

成長を欲するものはまつ根を確かにおろさなくてはならぬ。

上に伸びることを欲するな。まつ下にくひいることに努めよ。

◇

早年にして成長のこまる人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下にくひいることに没頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭さ、感激の強い心臓さ、よく立つ筆さを持ちながら、まるで勞作を發表しようさしない人

勞作
習作

飛躍
跳躍

がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打もないさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上になるか。私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生まれる筈はない。◇

◇
古來の偉人には、雄大な根の營みがあつた。その故に彼等の仕事は、味はへば味はふほど、深い味はひを示してくる。現代には、たごひ根に對する注意が缺けてゐないにして

も、ごもするご、それが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種ができるだらうか。か、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうか。か、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で、纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことができない。天を突かうごするやうな大きな願望は、いちけた根からは生まれる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬である。ここを考へて見なければならぬ。

くひいらう

教養は培養である。それが有効である爲には、まづ生活の大地にくひいらうとする根がなくてはならぬ。人々は餘りに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸収する力のない所では、何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが、私たちの前に乏しいとは思はない。たゞそれに相當する根が小さいのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。(偶像再興)

一六 日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上、各時代

日蓮上人
安房の人、法
華宗の開祖、
弘安五年(約
六四〇年前)
寂、年六十一。

高天闊地
踏天踏地



を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんこの大願を起し、この大願の前には、如何なる迫害を被るごもびくごもせずご覺悟し、法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。ご喝破し、眼中權勢もなく、威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の豪傑なりき。さりごて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる

人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時として禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に咽ばしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて、江馬遠江守の老臣ありき。この人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人と共に種々の迫害を被れり。上人龍口に斬ら



(筆山觀村下)法説辻人上蓮日

四條金吾
入道して日頼
といふ。正安
二年(約六三
〇年前)歿。
年七十三。
江馬遠江守
名は光時。

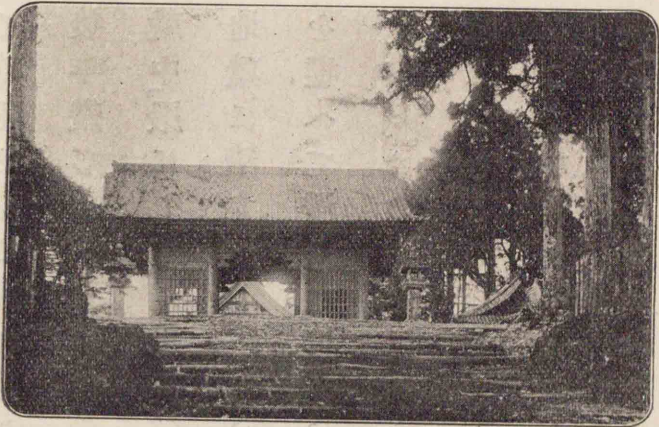
龍口
神奈川県鎌倉
町の西一里

れんさせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たごひ釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎ふごも、振切つて必ず殿と共に地獄に墮すべし。この意を述べられたり。その恩愛の濃かなること、喩ふべきものなし。天下の威武を敵として、一步も退讓するごごなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も

身延山
山梨縣南巨摩郡

父母
父は安房の一漁夫、或はいふ、實名左衛門重忠、母は清原氏なり



明らかに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隠るゝや、九箇年が間、五十餘町の嶮山を、一日もかゝさず一日に一度は必ず攀ち登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に、これと比較し得べき美談ありや。

池上
東京府荏原郡
波木井氏
南部實長、入道して日圓といふ。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて、波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ／＼いたはしく思ふ旨を述べ、終りに、知らぬ舍人を附けて候うては覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんご存じ候。ご記されたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむの情、たごしへなく貴からずや。
眞の豪傑は人の爲し難き事を爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び、世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。こ

豪邁
豪宕

の情愛なくば、かの豪邁もあらず、かの豪邁あればこそ、この情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花ご刺ご別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る糸即ち刺を織る絲なるにあらずや。(樗牛全集)

○
あまのり一ふくろ送り給ひ畢はんぬ。故郷の事はるかに思ひわすれて候ひつるに、今此のあまのりを見候て、よしなき心おもひ出でて、憂くつらし。片海市河小湊の磯のほごりにて昔見しあまのりなり。色形味はひもかはらず。なご我が父母かはらせ給ひけんご方違ひなる恨めしさ、涙おさへがたし。(新尼御前返事—日蓮)

野口米次郎

愛知縣の人、詩人、特に英米の詩壇に名あり。

一七 梅

野口米次郎

私共の東洋では、梅を四清三君とか、四花七香の隨一に推して、古來畫家の好題目として、その清楚を尊重して來てゐる。花卉美の鑑賞がごういふ具合に變化發達して、私共が今日梅を斯く珍重するに至つたかは、確かに研究に値する問題である。

東洋の精神を理解しない西洋人が、日本人はごうして梅をこんなに喜ぶのかごいつて驚くが、もつごもな事である。外形的に見ると、梅には、櫻や桃や牡丹や芍薬の美がない。支那の詩人は、暗香浮動月黄昏ごいつて、梅が如何なる場合に最も美であるかを語つてゐるが、香氣馥郁ごいつても、蘭や薔薇には及ばない。特に、もつご高い香氣に馴れてゐる西洋人には、梅の香氣は物足らない。私は西洋人から梅の美について尋ねられた時にかういふ、君等に梅

暗香浮動
疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏。(林逋梅花詩)



私共の心理

るのは、つまり私共の傳説詩歌を尊重することになる。西洋人は私にいふであらうして見ると梅には實際の美がない。それを見るには日本人の想像を持たねばならぬ事になる。私共は花よりも果實の點から梅の價値を認めてゐる。私共西洋人は實利的である。かういふ實利的な西洋人に直ちに日本人の想像を持てといふ事は無理である。然し私共に與へるに時間を以てするならば、私共の心理状態も次第に變化して、日本人の想像に入込まな

の美が見えないのは不思議でない。梅花の美は私共の想像から生れる。私共はそれを樂しむ。梅花の美は、それに直接に間接に關聯する傳説詩歌から生れる。私共が梅を尊重す

熱烈
冷靜

月ヶ瀬
奈良縣添上郡

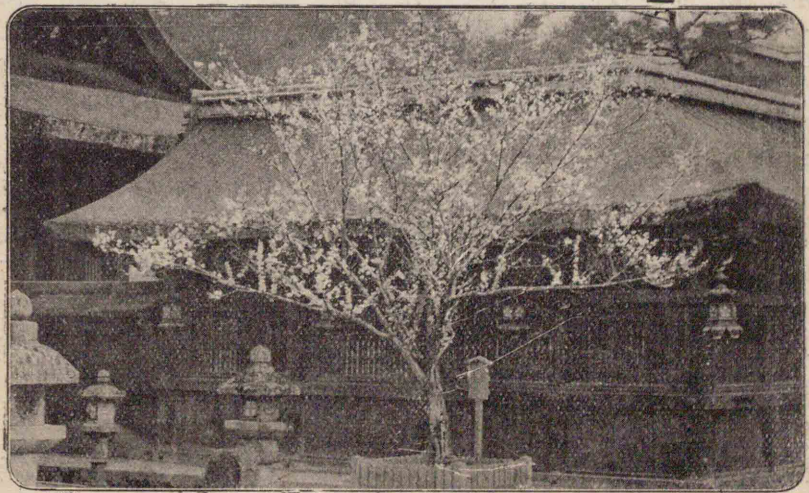
いとも限らない。事實私の友たる西洋人で、最初は梅とは無縁であつたが、今日熱烈な梅の讚美者となつた者が二三人ある。

その中に一人の畫家があつて、私はその男を梅黨に引入れるのに三四年かゝつた。この畫家も、フン、梅がどうしてそんなに綺麗に見えるかね。と、六七年前初めて日本へ來た時、私にいつたものが、今日では立派な梅の禮讚者で、毎年梅見に所々方々へ出掛けてゐる。私は彼に梅の香氣を語つた。梅の詩歌や傳説を語つた。菅原道眞から京都北野の天滿宮境内に及んで梅の事を語つた。月ヶ瀬の觀梅に出掛けよと語つた。彼が二三年前、私に送つた手紙を読むと、こんな文字が見出される。

「僕は君から道眞の傑出した事蹟を聞いた。又彼の嚴肅優秀な性質を聞いた。彼の風流韻事は帝室崇拜と相俟つて、私共西洋人にさへ襟を止させる。君は嘗て歌つて、梅は形體の美を犠牲にし

表象
表徵
象徴

て香氣を得た、花として進化の極點に達したものだ。梅は力の節約から得た充實を完全に表象してゐる。』といつたが、僕は梅を道眞に對照して考へる事を喜ぶ。道眞は實に力を節約して充實を得た梅の木のやうな人格者である。彼が梅を愛したといふ位、彼の人格にびつたり合つたことはない。梅樹の幹を見ると、千年の黒青い苔を帯びて、如何にも老いたといふ感があつても、その花を見ると、勇氣が凛々と鳴つて俗塵を寄せつけない。世の人格者は



北野天満宮

配所
謫居

正にかくあるべきものであらう。彼は筑紫の配所で、東風吹かばにほひおこせよ梅の花、あるじなしとて春をわするな、と歌つた。この時彼は單に感傷詩人ではない。彼の自然禮讚は、嚴肅な自己反省である。配所に居ても春を忘れない梅花の道眞は、至誠至忠の人格者であるであらう。僕はこの歌を考へながら、今京都の北野天満宮の境内を歩くと、梅の馥郁たる香氣は東風に送られて、社前を目がけて春の頌歌を無言に歌つてゐるやうに感ずる。境内の空氣みな香氣といつても決して過言でない。僕が目をつぶると、梅花が遠方から香氣の白雲となつてたなびき、道眞の靈前へと流れて來るやうに思はれる。僕が目を開けると、梅樹が灰白色の社殿を背景として立つてゐる。僕は未だ曾てかゝる柔い老熟した色の建築物を見た事が

鳥居
華表

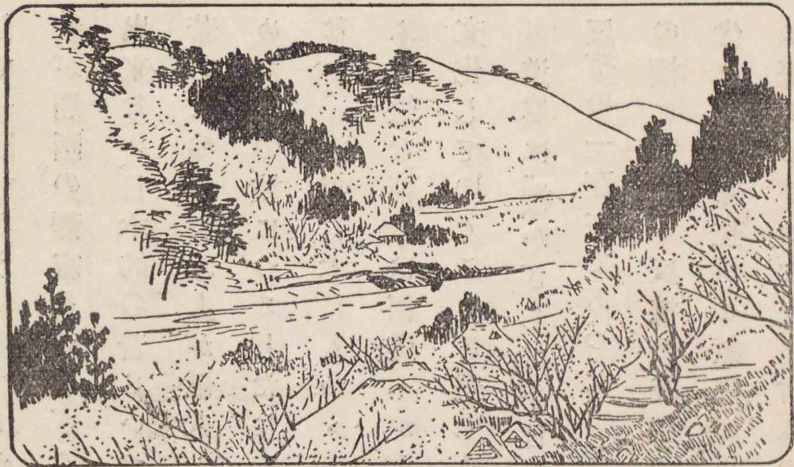
ないと同時に、未だ曾てこのやうに見事な梅林を見た事がない。
 「僕は今、神社の内庭から外庭の方へ歩んでゐる。こゝに大きな松が幾本もある。石の燈籠は行儀よく並立して、神様の哨兵としての役目を守つてゐる。神社の入口に大きな石の鳥居があつて、早春の空を衝いてぬつく立ち、恰も天の祭壇の如き姿を備へてゐる。僕はこの梅園の間を歩き、そこに据ゑてある茶店の縁臺に腰をかけるであらう。縁臺に敷いてある赤い毛氈は、僕等外人には特殊の興味なきを得ない。毛氈の赤と梅花の白との對照は極めて喜ばしい。僕はまだ誰がこの赤い毛氈を使用し初めたかを聞いたことはないが、そもゝの最初の使用者は、確かに藝術美を知つた人に相違ない。そしてこの毛氈の上につてゐる小さい粗末な煙草盆だが、これが又僕等外人に特殊の興味を與へる。この縁臺に腰をかけた老日本人が、竹の煙管を腰のあたりから取出

短冊
色紙

櫻かざして
 百敷の大宮人
 はいとまあれ
 や櫻かざして
 今日もくらし
 つ(山部赤心)
 今日九重に
 古の奈良の都
 の八重櫻今日
 九重に匂ひぬ
 るかな(伊勢
 大輔)

して、一服甘さうに吸つて、ポンと煙草盆の灰吹をたゞく、その堅い音が周囲の靜寂をつんざく。この音は到底他の國では聞く事が出来ない、日本的の音といつてこれ位日本のものはあるまい。
 若しこの老日本人が歌人か俳人ででもあつて、短冊に何か一筆認めて、梅の枝につるしたならば、これで好箇の畫景だが、さうはゆかない。近年日本にもかゝる老人が居なくなつたと見えて、かういふ愉快な情景は何處へか消えてしまつたらしい。日本も段々散文化してゆくことを悲しまざるを得ない。
 道眞は「櫻かざして今日も暮らしつ」の時代における、最も嚴肅な反抗の一存在であつた。そして梅は「今日九重」にほひぬるかなの櫻に對する反抗の表現であつた。日本の歴史は長い、北條時代は簡素な生活と氣高い思想との時代であつた。この時代精神は梅花とびつたり出會ふやうに思はれる。若し私共が櫻をして

敗類
類廢



平安朝を代表せしめるならば、梅に北條時代を代表せしめたい。今日は内容よりも外形に走る虚榮時代である。私は梅の精神を高唱して、時代の墮落敗類を救ひたいと思ふ。私の生れ故郷にある牛頭天王神社の境内の片隅に、小さい天神様の祠があつて、側の竹藪に數本の梅樹がある。天神様は梅が好きであつた。といふ事を知つた時、どんなにこの詰らない場所が神秘的に私に見えたであらう。私の梅の個人的追憶は、この事から始まらねばならぬ

かも知れない。然し私の觀梅といへば、數年前、月ヶ瀬の梅を見に行つた位が特筆すべきことである。私の月ヶ瀬に對する期待が、餘りに大きかつた爲か、最初はやゝ失望の感がないではなかつたが、それでも一歩行つては、兩山相蹙りて一溪明かなり、路斷えて遊人渡を呼んで行く。の邊を賞し、十步行つては、水は梅花と隙地を争ひ、倒さかさまに萬玉をひたして影斜横さかさまの風致を味はつた。特に私が一夜をここで宿り、翌早朝、道を右にとつて新道に入り、歸路についた時、私は後をふり返り、遙か遠方の山の懷から、昨夜の旅館が私を見送る邊を眺めた。あゝ、如何に閑雅幽靜にその風景が見えたであらう。芭蕉の句に、

春もやゝ景色さかさまのふ月と梅

とある。私はいつか何處かで、梅花と月の靜かな二聲曲を聞いたといふ思つてゐる。(私は現代風景を切る)

一八 元寇論

三宅雪嶺

三宅雪嶺
名は雄次郎、
加賀の人、文
學博士。
北條時宗
時頼の長子、
北條第七代の
執權。

日露戦役の酣なりし時、朝廷は北條時宗に従一位を追贈せさせ給ひぬ。

呑噓
併呑

おもふに元は國を滅ぼすこと四十有餘能くその呑噓を免れたるものあらざりき。而も我一たび此と干戈を交ふるや、之を撃破して、また近海に出没すること能はざらしめぬ。元、使者を遣して好を通ずるを求め、時宗斷乎として之を拒めり。かくて、戦端はこゝに開かれたり。之に就きて自ら三個の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。

文永五年
龜山天皇の御代。

甫めて
始めて

弘安四年
後宇多天皇の御代。

その三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて考ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣したるは、實に文永五年にありき。時宗甫めて十八、余はその拒絶の獨斷ならざりしを信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を経て弘安四年に至り、終に大舉して入寇す。時に時宗意氣方に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戦して元兵を鑿にしたるは、時宗與りて功ありとす。唯十三年間同一の方針なりしは、國論の之を致ししものとすべし。

心服
信服

高麗
今の朝鮮

不遜の國書

高麗、朕之史藩也、日本、遼、高麗、開國以來、時通中國。

元の好を通せんことを求め、而して我の之を拒絶せしは、稍穩かならざるに似たれども、彼の國書を閲するに、實に我に於て拒絶するの已むべからざりしを知るべし。その書や文辭堂々恩威並び具はる。彼必ず以て、我を心服せしむるに足ると爲ししならんも、顧みて我が日本の歴史より察すれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策あらず。その問を通じ好を結び、以て相親睦せん。といへるは、辭として難ずべきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、その語に明かなり。彼自ら何の異とする所あらざるべし。雖も、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらんことを欲するも豈

至ニ於朕身ニ無シ
一乘之使以通ニ
和好。尙恐ニ王
國知レ之未ダ
ナラニニシテ使
審、故特遣シ使
持書、布告
朕心冀、自今
以往、通問結
睦。以相親
睦。且聖
人以四海爲
家。不ニ相通好、
豈一家理乎。
以至用兵、
夫孰所
好乎。王其圖
之。(節錄)

能く得んや。當時彼の國書を覽し者、一人として書辭の不遜なるを咎め且憤らざりしは無かりしならん。國土面積の廣狹相懸隔するの著しきをおもひて、國力を誤信せし者は、成るべく圓滑に局を結ばしめんとして開戦に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしなり。元主、使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りて已むを得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならん。雖も、その此に出でたるは、もご我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、決して此に出でざりしなるべし。彼既に戦を開くに決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颯風

危殆
鬼胎

俄かに起り、兵船多く覆没す。我が兵之に乗じて襲撃し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶風の起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん。言者の説にして當れりせば、則ちかの開戦に決せしは策の宜しきを得ざりしものと謂ふべけれど、而もその言ふ所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戦に決せしは必勝の算ありしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵みな上陸し得たりせば、彼我の勝敗則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

堅固なりき
と傳ふ

過つ
誤る

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せし時といはれ、我に寇せし兵船は、コロンブスの亞米利加發見に用ひしものより、尙堅固なりきと傳へらるれど、その颶風に遭ひて多く破壊せしに觀るも、以て略、構造の如何を察するに足らずや。彼累りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれ無し。また彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず。既に十萬二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絶えず兵站の連繼を過たざること、果してその能くするを得る所なるか。糧を敵に因るの心算なりきとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。

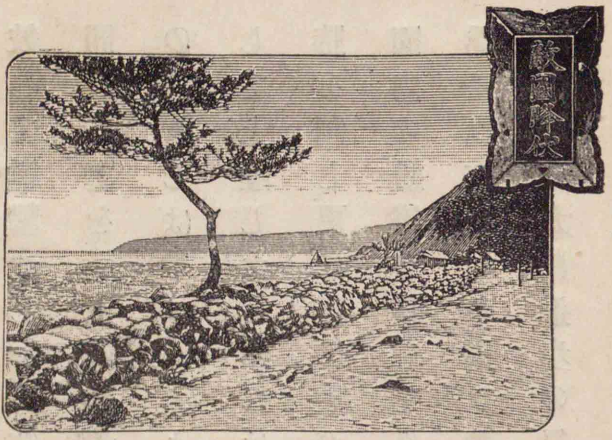
管に……のみならず
承久の亂
仲恭天皇の承
久三年

管に軍隊給養の難きのみならず彼我交戦の結果彼また勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂北條氏の兵畿内を指して西上せし者十九萬人若し之に關西の兵を合せば數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに我は地理に精しく便利を占むること亦多し。十萬二十萬の元兵を撃擢するに於て何か有るべき。戦亂を見ざるここ五十餘年に互りしと雖も國を擧げて武門の治を享け未だ嘗て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを経ずして天下麻の如く亂れ數年間唯戦争をこれ事させしもの決して偶然なりとせず當時この鬱勃たる士氣を以て元兵に對す之を殲滅するは寧ろ易々たりしなり。如何なる

爾後
爾來

加護
冥助

目睹
目撃



敵國降伏の勳額と石壘の址

點より察するも我彼を殲滅するの理ありて彼我を征服するの恐なし。我の斷乎として拒絶せる決して無謀の擧にあらず。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは謬想に過ぎず。龜山上皇の御身を以て國難に代らんご祈らせ給ひしはいごも畏し。既に上皇の御身を以て國難に代らんごし給ふを目撃す國內の民誰か奮つて國に殉ぜざらん。之がために上下擧りて國難に當らんごの決心

あかへら

塵殺
殲滅

較著
顯著

を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を
整へて東進し來りしとせんか。乃ち我が兵の如何に勇を
鼓して邀撃せしかは知るべきなり。その海上に於けるこ
同じく、之を陸上に塵殺したるや必するに難からず。颶風
の起りしは幸といふよりも寧ろ不幸といふべし。元兵に
して上陸したらんには、我初め多少の苦戦あらんも、終に全
勝を制し、更に勢に乗じて高麗を略し、かくて漸く醞釀せる
國內の紛争を移して、外地の經略を事したりしなるべく、
爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東
洋全體亦大に進歩の見るべきものありしならん。
元は一敗して後更に再舉を圖らんこそせしが、諫むる者あ

費しし所

來寇
入寇

りて遂に止めたり、智といふべし。この一役に於てだに海
岸到る處に造船の音喧しく、爲に費し、所莫大の額なりき
と傳ふ。故を以て若し一敗に懲りずして再舉を圖り、一層
の準備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾く
るに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十年後に分割せらる
るを待たんや。(小泡十種)

熙成の皇子

後村上天皇の
皇子。後に御
即位ありて後
す。龜山天皇と申
菜摘川
奈良縣吉野
郡吉野川の上
流。

一九 いのりなほし

熙成の皇子、いまだ幼うおはしましける時に、若き殿上人
數多件はせ給ひて、菜摘河の河澱の邊にて、鷹つかはせて、御
覽ありけるに、傍に、いさ大きな岩の、えもいはず面白きに、

實爲中將
藤原氏、實村
の子。

侍従

源忠行。

民部大輔
姓名未詳。

侍従こそ
承りつれ

松の生ひいでたるありけり。皇子御覽じて、この岩を歸り
なん時、皇居の御庭にもてまゐれ。上に奉らん。實爲中將
に宣ひければ、幼き御心を推し量りて、みこさうけし給ふ。
鳥など、數多とりて歸らせ給へる時に、侍従に、岩を忘れた
まはじ。宣ひければ、民部大輔が、力も強く侍れば、御後より
もて参り候ふなり。啓して、さて皇居に還りいらせ給ふ。
御鷹の鳥など奉らせ給ひて、實爲中將に、ありつる岩を。こ
召させ給ふに、侍従こそ仰言を承りつれ。啓し給へば、侍従
を召して、いかに尋ねさせ給ふ。民部大輔の、御後よりもて
來んといひ侍るを、民部を召させ給ひなん。啓す。中將の、
ありつることを奏し給ひければ、上にもをかしがらせ給ひ

て、誠に面白からん、岩こそ見まくほしけれ、民部の力強けれ
ば必ずもて來なん。宣ふ。

もて來なん
かゝる事な
んある
据ゑ。

中將立ち返り給ひて、民部大輔に、かゝることなんある、い
かがせん。宣へば、すべきことこそあれ。さて、御庭にありけ
る小き岩に、松の枝を取りつけて、中將と、いと重げに持ち
て、宮の御前に据ゑ奉れば、これは、いと小さくこそあれ、それ
にはあらじ。むつがらせ給ひければ、民部大輔の、さればこ
そ、その岩を持ちて上の山を通り候ひしに、右左、山のさし出
でて、道のいと狭き處にて、かなひ難く、いかにせん。たゞよ
ひ侍りしに、向の方より山伏の來りけるが、岩にせかれて通
られぬなり。除け給へ。罵りける程に、我もせん方なきに、

かくて侍り。『ごわぶれば、さらば、すべき事こそあれ。さて、數珠をおし揉み、何やらん呟きて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすく、ご通りて侍りし程に、山伏も行き過ぎしを、呼び返して、『もとの如く祈り直してよ。』といひければ、『また、ゆく先に細き道のあらんに、如何し給はん』といひし程に、げにもご思ひ侍りて、そのまゝもて参りぬ。』といひ給へば、上より始め、ありつる人々をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もよくならせ給ひて、『げにさもあらん。その山伏を召返せかし。』ご宣ふに、『はや、遙かに行き過ぎて、いづこへ行きけんも知られず。』ご啓し給へば、『本意なきここにこそあれ。』ごめて、民部大輔が、大きなるそら言を、小さきやうに祈らせんものを。ご笑は

こそ、しか

吉野拾遺

吉野朝の事蹟を假名にて記せる書、奥書に松翁とあり。

羽黒山

羽前國東田川郡にあり。昔時山伏の修業場たり。

大峰・葛城

ともに大和國の高山。昔修験者の登渉練習せし處。

せ給ふにこそ、御行末頼もしく、いごせめて覺えたりしか。

(吉野拾遺)

二〇 柿山伏

山伏 罷り出でたるは、出羽の羽黒山より出でたる山伏でござる。このたび、大峰・葛城參詣致し、只今下向道でござる。よき序なれば、檀那廻りをいたさうと存ずる。まづ、



柿 山 伏
 所は程遠さうにござる。なんこいたさうぞ。いえ、こゝに見事な柿がござるほどに、一つ取つて食べやう

存ずる。

存ずる。

柿主 罷出でたるはこの邊のものでござる。今日も行てま
 た柿を見舞はうと存ずる。なんぞ致してやら、鳥がつい
 て迷惑致す。いえ、こゝな、鳥が食ふかして、蒂へたが落ちたが、
 わゝ、核たねも落つるが、上に鳥が居るか。いえ、山伏があがつ
 て居るが、なんぞ致さうぞ。いや、彼奴をなぶりませうぞ。
 はあ、上に猿奴があがつて居る。

山伏 はあ、柿主奴が見つけた。なんぞ致さうぞ。

や・異なことぢ。

柿主 はあ、彼は猿ぢやが、身せせりをせうとぢやが、身せせ
 りをせぬ。異なこぢや。

山伏 わ、某を猿ぢやといふが、はあ、こりや身せせりをしませ

うず。

柿主 ふん、猿に紛ふところはな。猿なら啼かうぞえ。

山伏 はあ、こりや啼かざるまい。きやく。

柿主 はあ、猿に紛ふところはな。猿かと思へば、犬ぢやげ
 なわいやい。

山伏 はあ、またこりや犬ぢやといふ。

柿主 犬なら啼かうぞよ。

山伏 はあ、これや啼かざるまい。びやく。

柿主 はあ、犬ぢやく。犬かと思へば、鳶ぢやげなわいやい。

山伏 はあ、またこりや鳶ぢやといふ。

柿主 鳶なら飛ぼぞよ。

言うて

山伏 飛ばざなるまい。

柿主 鳶なら飛ばぞよ、鳶なら飛ばぞよ、飛ばぞよ。 ありや飛んだわ。

山伏 あ、痛、痛。 やい、そこなもの、某が木の空に居れば、貴い山伏を、いや犬で候の、猿で候のと言うて、何故に腰を抜かしたぞ。 急いでくすらうて返せ。

柿主 やい、そこなもの、柿を喰て恥かしくば、御免なれと言うて、音おとせて往ね。

山伏 やい、そこなもの、山伏の手柄には、目に物見せうぞよ。

柿主 そちが分として目に物を見せたりとも、深いことはあるまいぞ。

山伏 定ちやうどこいふか。

柿主 おいでもないこと。

役の行者
名は小角、文
武天皇の頃の
人。

山伏 定こいふか。 それ山伏といつば、役の行者の跡を續ぎ

難行、苦行、こけの行をする。 今この行力叶はぬかこて、一禱ぞ禱つたる。 橋の下の菖蒲は誰が植ゑた菖蒲ぞ。 ぼ

うろぼん、ぼうろぼん。

柿主 此のやうな處に永居は無用、急いで罷り歸らう。

山伏 ぼうろぼん、ぼうろぼん。 いろはにほへとちりぬるをわか。 ぼうろぼん、ぼうろぼん。 たつた今に禱り戻すぞ。

柿主 扱も（祈り戻さるゝ體）行くに行かれぬ。 無念な事でござる。 是非に及ばぬ。 宿へ連れていくすらうて進ぜう。 こ

進ぜう。

れへ負はれませい。やつごな、やつごな。おのれがやうな山伏は、まづかうして置いたがよい。(打倒して入る)

山伏

やい、此の尊い山伏をうちこかいてどちへ行くぞ。人はないか、捕へて呉れい。やるまいぞ。(狂言記による)

ウフ、これは、けしからぬ笑なり。ウフ、は鼻の先であしらふなり、口を尖らして笑ふなり。何だ、馬鹿な事を言つて居ると、自ら鼻を高くし、他を見下して冷笑するなり。一知半解の徒、この笑を爲す。眞に笑の徳を解せざるものと見えたり。エヘ、これ、けしからぬ笑なり。エヘ、は他の鼻息を伺ふなり、顎を突出して笑ふなり、強ひて笑ひて媚を呈するなり、輕薄なり、封間的なり。イヒ、何たるいやらしき笑ぞ。イヒ、は、よい氣味なりと、他の失策を喜ぶなり、陰險なり。オホ、は、所謂破顔微笑なり、うれしきなり。息子の金鵝勳章を貰ひし時、親の笑ふは、これなるべし。アハ、

は、たゞ可笑しきなり、所謂呵々大笑なり。前の四者の笑には「我」あり、アハ、に至つては「無我」なり、平等なり、恩怨を脱したるなり。

(笑の文學——大町桂月)

二一 土の匂

長塚節

春は空からも土からも、かすかに動く。毎日のやうに、西から埃

を卷いて来る「はやて」が、ごうかする

長 じはたご止まつて、空際には、ふはふ

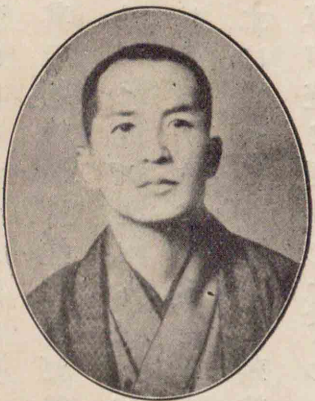
はした綿のやうな白い雲が、ほつか

りごあた、かい日光を浴びようご

節 して、僅かに立ちのぼつたごいふや

うに、じつご動かずに居ることがあ

る。水に近い濕つた土が、暖い日光を念ふ存分に吸うて、其の勢づ



長塚節
笑城縣結城の
人、歌人、大
正四年、癸、年
三十七

浴びよう
いふやうに

刺戟
刺激

いた土の微かな刺戟を根に感じさせる。田圃の榛の木のみな
蓄は、目に立たぬ間に少しづつ、延びて、ひら／＼と動き易くなる。
其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちで
もこつちでも、く／＼と鳴きだすところがある。空から射す日の光
はそろ／＼と熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止まない。
土はすべてを段々と刺戟して、堀のほごりには、蘆や、芝や、其の他の
草が空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟かさに満たさ
れた空気を更に鈍くする様に、榛の木の花はひら／＼と絶えず動
きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の状態か
ら離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いた様子をして、空を仰
いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡
眠から復活したことを空に向つて告げる。遠くから聞く時は、彼
等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。

絶えず
堪へず

彼等は更に、春の來た事を一切の生物に向つて告げる。草や木
が心づいて、其の活力を充分に發揮するのを見ない中は、鳴く事を
止めまいと努める。田圃の榛の木はさうに花を捨てて、自分から
先に、嫩葉の姿になつて見せる。その黄色味を含んだ嫩葉が、爽か
な朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだたゆたう
て居る周圍の林を見る。岬の様な形に偃うて居る水田を抱へて、
周圍の林は漸く其の本性のまに／＼、勝手に白つぼいのや赤つぼ
いのや黄色つぼいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急い
で一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこゝらに散在
して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い
瞳を聚めて、羞かしさうに葉の間から、こつそり四方を覗く。雑木
林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や
芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、「春がふけた。」と呼びか

ける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、之を仰げば眩ゆさに堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉の破れるまでは、劇しく鳴かうとするのである。蛙は愈益、鳴きはこつて、檜の木やうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

此の時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地に附いて居たすべての雑草が爪立して、たゞ空へくと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引留めて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。

冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石

絛絲
生絲をより合
はせたるも
の。

に吸はれる如く、土に直立して、めい／＼手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら殊更に鳴きたてる。白い絛絲のやうな雨は、水が田に滿つるまでは注いでまた注ぐ。鳴くべきときに鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し／＼働いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせ、と促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を飲むときには、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと靜かな夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇る様に、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢるとき、蛙の聲はめつきり遠く距つて、それがぐつたりと疲れた耳を擦つて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗

恢復
回復

麥の葉は天
つひばりの
靡ひいきひ
とはくきひ
揺りもての
ふらしに節

を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、其の覺

麦の葉は天つひばりの
靡ひいきひとはくきひ
揺りもてのふらしに節

醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を呼返すのである。草木は、遠く遙かに響けと鳴く其の聲にゆられつゝ、夜の間にも生長する。櫟や檜や、其の他の雜木は蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴きやむ季節迄は、幾らでも繁茂する事を繼續しようとする。そこには、毛蟲や其の他の淺ましい損害が、或は有るにしても、しこくしこく屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思はれる迄に、力づよい緑が地上を掩うて、さはやかな涼しい陰をつくるのである。

る。(土)

二二二 自然の愛好

藤岡作太郎

藤岡作太郎
東國と號す、
石川縣の人、
文學博士、
明治四十三年
授、年四十一

迎へ
酬い

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美温雅なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民がその一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品玩具などの多かる中に、露を

思ふ
忍ぶ

帯びたる植木の葉の翠花の紅こそカンテラの光に映えて
みづつしく鮮かなるを、市民はあれこれと買求めて、座敷
に飾り、庭に植ゑこむ。裏長屋の道具の据所もなき窓前に
も稗蒔作りて田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に田芋を育
ててやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅
に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に
涼し。上下貴賤を通じて自然を愛好することかくの如き
は他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。
自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも
吹亂す二百十日の風も野分の名にやさしく、峰も谷も一つ

恐ろしき猪
和歌こそなほ
をかきしもの
のしづ山がつ
いひつれば
面白く、恐ろ
もふすのし、
さといへば、
さしくなり
ぬ。(徒然草)

源氏物語

紫式部著、五
十四帖あり、
平安朝の公家
の生活を掛け
る物語。

に埋みてすさまじき冬の山里も深雪といへばみやびや
なり。「恐ろしき猪もふすの床を稱ふるにやさしく聞ゆ。」
など兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明
せるなり。雨といへば照りつゝきたる夏などは嬉しけれ
ど、一日の降も十日の照より飽きくするに、卯の花くたし
時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表はるのみならず、その名を借り
て屢、人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に夕顔、末摘
花、葵、柳、朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴虫、紅梅等あり。菓
子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚擧するに違あ
らず。今の刻煙草の名にも福壽草、白梅、臯月、あやめ、萩、紅葉

等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるも、やさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よく之を尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意こす。花に對する我等の趣味が如何に西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹

自動的

任意的
強制的

ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峰に互り川に沿ひて、雲こたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さざらんこと。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆、石盆、栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチウリップ、ピヤシンスなど、その葉に何の趣もなくし

妖艶
清艶

てその花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美しきところかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよく、ご下蔭の蟲の音にもゆらく様、ますほの色はやがて白くほゞけて、露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。

日本人が花を愛するはその外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり。たゞちに自然の懐にわけ入つて、その眞意を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きはこれ日本國民の特性なり。

(國文學史講話)

人の感情を抒べるのにも、皆自然の景色を以て表はす。涙の瀧といひ、袖の時雨といひ、露の袂といひ、花の心といひ、思の煙といひ、頭の雪といひ、消えいるといひ、時雨るといふ。自然の景色の語は、直ちに吾人の感情の語である。人事と自然とを比較して、人生より直ちに自然をおもひ、自然よりも直ちに人生を思念するのである。これが和歌から導かれて、國文學全體を通じて、軍記・謠曲・淨瑠璃等一般のもの、の根柢をなして居る。秋風といへば寂しいことを連想し、春雨といへば暖い靜かな感じがある。歌の語は一つのコンヴェンションを利用して、一種の情景を連想させる力をもつて居る。俳句はこれを利用して十七字の小詩形をなし得たのである。

(自然美と國文學—芳賀矢一)

コンヴェンション
Convention.
因襲。
芳賀矢一
福井縣の人、
文學博士、昭
和二年歿、年
六十一。

吉田絃二郎

本名は源次郎、福岡の人、文學者、早稲田大學講師。

一三三 正直であれ

吉田絃二郎

「正直であれ。」とは、誰もいふ言葉である。自己に正直であれといふことも、可なり言ひ古された言葉である。正直であることは、即ち自分の魂を生かして行く唯一つの正しい道である。

正直であることには、非常な勇氣を必要とすることも覺悟しなければならぬ。私達は自己に正直である爲に、多くの敵を持つことを恐れてはならぬ。人に憎まれることを恐れてはならぬ。堂々の戦を恐れてはならぬ。

心の弱いといふことは、時として一種の罪惡となる。正しいことの爲に戦ふことの出来ない臆病者は自分の魂を

記憶・臆病

救ふ機會を失ふ。

しかし、考へなければならぬことがある。自己に正直であれといふことは、自分の胸に思つたことを言つてしまへといふことではない。

私は時々「自己に對して正直であれ。」といふことを穿き違へた人々の不快な言葉を聞くことがある。自己に對して正直であると同時に、私達は他人に對する正直を忘れてはならぬ。自己に正直であることは、自己の魂に對する親切心である。私達は自己の魂に對すると同じ強さの親切心を他人の魂に對しても持つてゐなければならぬ。謙虚な自分の魂に對して恥づることのない言葉のみが、

純一
純真

自己に正直な言葉である、純一な素樸な魂そのものさ、
 やきである。人の悲しみに對して、人の苦痛に對して、そ
 がれる涙こそ最も自己に正直な言葉である。
 正直な言葉は一時は相手の感情を傷ふことがあるかも
 知れぬが、必ず相手の魂を生かす。相手の魂を生かさな
 やうな言葉は決して正直な言葉ではない。
 言ひたいことを言ふのが決して正直な言葉ではない。
 それは最も厭ふべき、憎むべき不正直な言葉である。言ひ
 たいことこそ、言はねばならぬことこそは大分違ふ。
 言ひたいことは、どのやうな臆病者も言ふ。言はねばな
 らぬことは、勇氣ある人でなければ言へぬ。

言ひたい

匿名の手紙などを出して、言ひたいことを言ふのは、最も
 卑怯な人間のやり方である。面を對つて言はねばならぬ
 ことを言つたのは、キリストであり、佛陀であり、孔子である。
 言ひたいことを言つて、自分の責任を免れようとするく
 らる卑しい人間はない。彼等は人の魂を傷つけることを
 喜ぶ卑劣漢である。彼等の言葉は人の魂を傷つけること共
 に、自分の身の魂を亡ぼす。
 言はなければならぬことを正直に語るものは、常に多く
 の敵を持ち、十字架を負はなければならぬ。しかし、その言
 葉は人を生かし、彼自身の魂を救ふ。
 言はなければならぬことを言ふ人の言葉には、自責の念

があり、涙があり、感謝があり、同勞者の憐愍がある。私達は子を打つ親の眼に涙が泛んでゐることを忘れてはならぬ。鞭うつたるゝものよりも、鞭うつものの苦痛の、更に深く切なることを知らなければならぬ。

鞭うつ者も泣け、鞭うつたるゝものも泣け。泣いて共に祈る時、神の國の扉が開かれるであらう。

鞭うつものも祝福せられ、鞭うつたるゝものも祝福せられてあれ。

正直な言葉はいつも愛から生れて來る筈である。憎みから生れる言葉ほど不正直なものはない。(小鳥の來る日)

後篇

平家物語抄

平家物語に就いて

藤岡作太郎

平家物語は平安末期における源平の争亂を描きたるものにして、結局平家が西海に落ち行きて、底の藻屑と化せる一篇の悲劇なり。

平家物語を讀みて吾人の最も感興を深うする所以のものは、それが歴史上空前の事實たる源平争鬪の一大悲劇を寫せる點にあり。從來、文運盛にして、作家が想像に生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國未だ嘗てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず。壽永の天地を舞臺として自然が演ぜるこの活歴史は、貧弱なる人間想像の埒を超越して、言葉の儘に小説よりも遙かに奇なるものありしなり。もとより平家は純粹正確なる歴史にはあらざるべし。その間著者が想像も交れり、傳説の誤れるものも亦多かるべし。而もその歴史的事實を土臺として取捨鹽梅せるものなるに至りては、斷として疑ふべくもあらず。況やその事實たる、わが歴史

にあらはれたる最大悲劇にして、その局面の變化に富める、また尋常一様のものにあらざるをや。平家が今日なほその讀者をして歎賞の聲を絶たざらしむるもの、洵に故ありといふべし。

源平争亂の事實は何が故に詩的にして多趣味なるか、曰く、平家一門二十餘年の盛衰が、急轉掌を覆すが如きものありしを以てなり。たゞ榮枯地を變ふる、夢の如くなりしのみを以ていはば、南北朝と多く異なることなし。されど是は從來固定したりし社會の階級の動搖して、全く調和を缺ける新舊の二潮流が、こゝに始めて久しく蓄へ來れる威力と新進氣鋭の生氣とを以て、堤を決して衝突せるもの、混沌澎湃の狀ほど想見すべからずや。南北朝の戰亂は、その初はまた武士と公卿との争なりきといへども、しかも當時の公卿は既に武を練ること日久しく、實は武を以て武に當れるものなり。源平時代の争鬪はすなはち然らず、源平兩武家の戰といふも、まことはこれ文と武との争なり、新と舊との戰なるなり。この大混戰の渦中に投じて、新舊衝突の犠牲となれるものを平家の一門とす、特に清盛が一生こそ、これを代表して餘あるものなりしか。

宇治川の合戰脆くも敗れて、腹かき切らんと扇の芝に坐したる源三位頼政が最期の辭に「埋木の花さくこともなかりしに身のなるはてぞ悲しかりける」とよめる、

薩摩守忠度が都落に馬の首を廻らして、俊成が五條の館を叩き、この中一首にても撰集に入るべきものあらば生涯の面目なりとて、己の家集を預けて去れる、また一の谷の櫓の上に吹きすさぶなる笛の音に、木戸口に眞先かけたる朴訥の熊谷直實をして、平家の公達は姿も心もやさしき上臈よなとて、感歎の聲を放たしめし風流などの詩味油然として興趣湧くが如き感あるも、當時新舊思想を代表せる文武の對照が、餘りに著しきによるるべし。平家の著者は固よりまたこの對照の讀者の感興を惹くに足るべきを信じ、肉動き骨鳴る勇ましき戰物語の間々には、この優美可憐なる話柄を挿み、以てその庶幾するところを達したるは、苟くもこの篇を繙くものの容易に看取するところなるべし。

平家物語は縦に雄大悲壯の戰記を貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜すると共に、また實に幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。これ著者が平家物語一篇を述作せる目的の存するところ。畢竟この主張ありて、治承の春を名殘に、壽永の秋を西國さして落ち行ける夢よりも果敢なき平家一門の榮枯盛衰の史に、言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんば止まざらんとす。その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。」といふに起して、結末の灌頂の巻に、建禮門院が後白河法皇への物語に、その身の經過せる一生を六道に譬へたまへりといへるに考へて、その全豹を推すべし。(國文學史講話)

祇園精舎

釋迦最初弘法の道場五精舎の一。

沙羅雙樹

昔印度拘尸那城外に沙羅樹あり、其の四木特て高く相對して、雙をなす。釋迦如來此間に入滅す。又此に此の木枯れて白色となりしより鶴林といふ。

趙高

秦の佞臣。

王莽

漢の逆臣。

周伊

宋の諛臣、或は朱異の誤か、朱異は武帝に仕へ、遂に梁を亡す。

祿山

安祿山のこと、唐の逆臣。

承平、天慶、朱雀帝の年號

一 祇園精舎の事

祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をこぶらふに、秦の趙高漢の王莽梁の周伊唐の祿山、これ等は皆舊主先皇の政にも從はず、樂を極め諫をも思ひ入れず、天下の亂れんことをも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者ごもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門天慶の純友康和の義親平治の信賴、これ等は驕れることも猛き心も、皆ごりごりなりしかごも、間近くは六波羅の入道前の太政大臣平朝臣清盛公ご申しし人の有様傳へ承るこそ、心も言葉も及ばれぬ。

その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子一品式部卿葛原親王

將門

平將門。

純友

藤原純友。

康和

堀河帝の年號

平治

二條帝の年號

義親

源義家の子。

信賴

藤原信賴。

平氏略系

桓武天皇—葛原親王—高望王—國香—貞盛—維衡

正衡—正盛—忠盛—清盛—貞光—房家—貞能

九代の後胤讚岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。かの親王の御子高親王、無位無官にして失せ給ひぬ。その御子高望王の時、始めて平の姓を賜ひて、上總介になり給ひしより以來、忽ちに王氏を出でて人臣に連る。その子鎮守府將軍良望、後には國香ご改む。國香より正盛に至るまで六代は、諸國の受領たりしかごも、殿上の仙籍をばいまだ許されず。

然るに忠盛未だ備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛をすゑ奉らる。供養は天承元年三月十三日なり、勸賞には關國を給ふべきよし仰せ下されける。折節、但馬國のあきたりけるをぞ下されける。上皇なほ御感のあまりに内の昇殿を許さる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。雲の上人これを猜み憤る。かくて忠盛刑部卿になつて、仁平三年正月十五日、年五十八にてうせ給ひしかば、清盛嫡男たるに

天承 崇徳帝の年號
 仁平 近衛帝の年號
 保元 後白河帝の年號
 宇治の左府 左大臣藤原頼長
 平治 後白河帝の年號
 義朝 源義朝

よつて、その跡を繼ぎ、保元元年七月に、宇治の左府世を亂り給ひし時、身方にて、先をかけたたりければ、勸賞行はれけり。もこは安藝守たりしが、播磨守に遷りて、同じき三年に太宰太貳になる。又平治元年十二月、信賴義朝が謀反の時も、身方にて、賊徒を討ち平げたりしかば、勳功一つにあらず、恩賞これ重かるべしとて、次の年正三位に叙せられ、打ち續き、宰相衛府督檢非違使別當中納言大納言にへあがつて、剩へ丞相の位にいたる。左右を經ずして、内大臣より太政大臣從一位にいたり、大將にあらねども、兵仗をたまはつて、隨身を召し具す。牛車輦車の宣旨を蒙つて、乗りながら宮中を出入す、偏に執政の臣の如し。太政大臣は、一人に師範として

平家物語卷第六
 平治四年合戰狀第三番御筆
 後白河院之錦標有諸行與常陸守
 藤原樹花之顯威者各表現倉人不知
 久如春夜之身武者終成同風前儀
 遠近異朝奉禮高深王奔其典處

本寫古語物家平

四海に儀刑せり。國を治め、道を論じ、陰陽をやはらげ理む。その人にあらずば則ち闕けよ。といへり。則闕の官も名づけられたり。その人ならでは穢すべき官ならねども、この入道相國は、一天四海を掌の中に握り給ふ上は仔細に及ばず。(卷二)

二 教訓の事

太政入道は、赤地の錦の直垂に、黒絲威の腹卷の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の次に、靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに給はられたりける、銀のひるまきしたる小長刀、常の枕を放たず立てられしを、脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方、その氣色ゆゝしくぞ見えし。貞能と召す。筑後守貞能は、木蘭地の直垂に、緋威の鎧きて、御前に畏まりてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事はいかゞ思ふぞ。保元に、平右馬

太政入道 平清盛
 嚴島大明神 廣島縣佐伯郡嚴島にあり、市杵島姫命を主神とす
 貞能 平家貞の子
 平右馬助 平忠正、清盛の叔父

新院
崇徳上皇。
一の宮
重仁親王。
故刑部卿
平忠盛。

故院
鳥羽院。

院
後白河法皇。
内
二條天皇。
經宗
藤原經宗。
惟方
藤原惟方。
成親
大納言藤原成親。
西光
俗名藤原師光。



皇法河白後

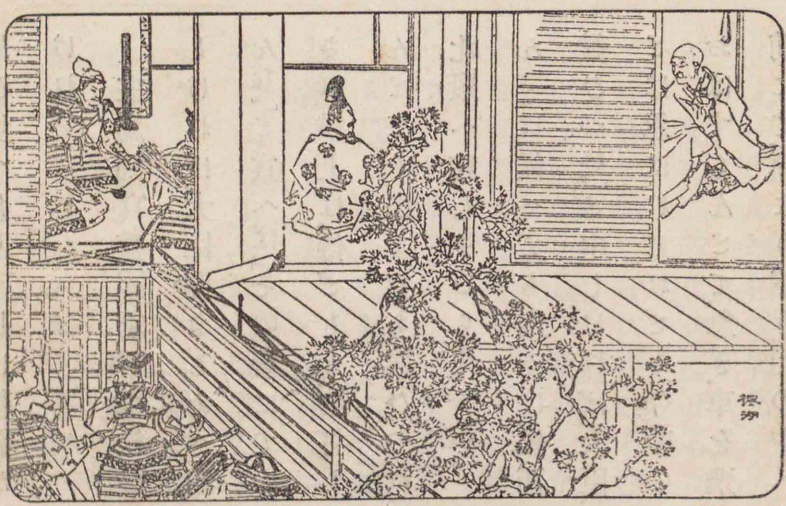
反の時院内を取り奉つて大内にたてこもり、天下暗闇となりたりしにも、入道、随分身を捨てて、凶徒を追ひ落し、經宗惟方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に、既に命を失はんとする事、度々に及ぶ。されば、人、何ぞ申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の無道人が申すに、君のつかせ給ひて、動もすれ

助を始として、一門半過ぎて、新院の御方に参りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の養君にてまし、しかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先をかけたたりき。これ一つの奉公。次に、平治元年十二月、信賴義朝が謀

當家
平氏。

鳥羽の北殿
鳥羽殿の内にあり、鳥羽郡上鳥羽村伊城南の離宮。

入道
清盛。



(筆湖根本松) む 諫 を 父 盛 重

ば、この一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も、讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されんぞと覺ゆるぞ。朝敵となつて後はいかに悔ゆるも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇をば、鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて、北面の者共が中より、矢をも一つ射んずらん、その用意せよと、侍ごにも觸るべし。大方は入道、院方の奉公

させなが
着背長、大將
の鎧。

小松殿

重盛の邸。

大臣

内大臣重盛。

法住寺殿

京都下京區瓦
町三十三間堂
の東にあり
き。

禪門

入道をさす。

西八條殿

清盛の邸。

思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。させなが取り出せ。ここを宣ひ
けれ。

主馬判官盛國急ぎ、小松殿へ馳せまゐつて、世は、はやく候。と申
しければ、大臣聞きもあへ給はず、あゝはや、成親卿の頭刎ねられた
んな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御させながを召
され候上は、侍どもも、皆打ち立つて、只今、院の御所法住寺殿へ寄せ
ん。ここそ出で立ち候ひつれ。「暫く、世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の
北殿へ移しまゐらするか。然らずば、是へまれ、御幸をなし参らせ
ん」とは候へども、内々は、鎮西の方へ流し参らせん。ここそ、議せられ
候ひつれ。と申しければ、大臣、何に依りて、只今さる事のおはすべき
とは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともや
おはすらん。とて、急ぎ、車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。門
前にて、車より下り、門の中へさし入つて見給ふに、入道腹巻を著給

大文の指貫
大なる模様の
織出しあるく
くり袴。

内府

内大臣、重盛
をさす。

五戒

不殺生戒、不
偷盜戒、不邪
淫戒、不妄語
戒、不飲酒戒。

五常

仁、義、禮、智、
信。

素絹の衣

生絹にて作り
たる僧衣。

ふ上、一門の卿相、雲客數十人、各色々の直垂に、思ひくゝの鎧著て、中
門の廊に、二行に著座せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司な
ごは、縁に居こぼれ、庭にもひしこ並み居たり。旗竿ども引きそば
め引きそばめ馬の腹巻をかため、冑の緒をしめ、只今皆打ち立たん
ずる氣色、ごもなるに、小松殿、烏帽子直衣に、大文の指貫のそばこつ
て、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道、ふしめになつて、あはれ、例の内府が世をへうする様に振舞
ふ者かな。大いに諫めばやと思はれけれども、さすが、子ながらも、
内には、五戒を保つて、慈悲を先とし、外には、五常を亂らず、禮義を正
しうし給ふ人なれば、あの姿に、腹巻を著て向はん。ここ、さすがおも
はゆう恥かしくや思はれけん、障子を少し引き立て、腹巻の上に、素
絹の衣を、あわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の、少しはづれ
て見えけるを、隠さんと、頻りに衣を引違へくぞし給ひける。大

邊地粟散
小國を稱す。

天兒屋根命
藤原氏の祖。

臣は、舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひいださるゝこともなく、大臣も、又申し上げらるゝ旨もなし。やゝあつて、入道宣ひけるは、あの成親卿が謀反は、事の數にも候はず。一向、法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。と宣へば、大臣聞きもあへ給はずはらゝとぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに。とあきれ給へば、やゝあつて、大臣涙を抑へて、この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんこては、かならず悪事を思ひ立ち候ふなり。又、御有様を見參らせ候に、さらに現こも覺えず候。さすが我が朝は、邊地粟散の境こはまうしながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の、甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらずや。就中、御出家の御身な

解脫幢相の衣
幢幡の物を示す如く、出離解脱を求むる佛道修行者のしるしの衣。即ち僧衣。

普天の下

普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。(詩經)
許由堯の天下を譲らむといふを聞き耳汚れたりとして、潁川に洗ひしこと、隠逸傳に見ゆ。

り。それ、三世の諸佛、解脫幢相の法衣をぬぎ捨てて、忽ちに、甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさんこと、内には、破戒無慚の罪を招くのみならず、外には、仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁恐ある申し事にて候へども、心の底にしいしゆを残すべきにも候はず。まづ、世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に、尤も重きは朝恩なり。普天の下、王地にあらずといふことなし。されば、彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すこと承はれ。いかに況や、先祖にもいまだ聞かざりし、太政大臣を極めさせ給ふ。所謂、重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位にいたる。加之、國郡半ば一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ稀代の朝恩にあらずや。これらの莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく、法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背

蓮府

丞相大臣など
をいふ。

槐門

三公をいふ。

人皆心あり

十七憲法の第
十條

かせ給ひ候ひなむず。それ、日本は神國なり。神は、非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思召し立たせ給ふ所、道理半なきにあらざ。中にも、この一門は、代々の朝敵を平げて、四海の激浪を鎮むることは、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは、傍若無人とも申しつべし。聖徳太子十七箇條の御憲法に、人皆心あり。心、各執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。是を以て、たこひ人怒るといふとも、却りて、我が咎を恐れよとこそ見えて候へ。然れども、當家の運命、未だ盡きざるによつて、御謀反、既に顯れさせ給ひ候ひぬ。その上、仰せ合せらるゝ成親卿を召し置かれぬる上は、たこひ君、いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐れか候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退きて、事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には、愈、奉公の忠勤をつくし、民のためには、益、撫育

千顆萬顆の

盤、日笠、風、高低千顆萬顆之玉。染、枝、染、波、表裏一入再入之紅。(和漢朗詠集、菅原文時)

迷盧八萬の巔

迷盧は蘇迷盧の略にて須彌山のこと高き八萬由旬ありといふ。

の愛憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、なごか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎私なし。道理と僻事を並べんに、いかでか道理につかざるべき。これは、尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛はじめ叙爵より今大臣の大將にいたるまで、しかしながら、君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にも猶過ぎたらん。然らば、院中へ参り籠り候ふべし。その儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍共、少々候ふらん。これ等を召し具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな君の御爲に奉公の忠を致さんとするれば、迷盧八萬の巔よりもなほ高き

蕭何は漢高祖の臣蕭何、高祖に上林苑中の空地を人民に貸し與へて田を作らしめんとす。高祖の之を怒りて罪したるをいふ。

父の恩忽ちに忘れんとす。いたまじきかな、不孝の罪をのがれんとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、只重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず。又院をも守護し參らすべからず。されば、彼の蕭何は大功かたへに越えたるによつて、官大相國にいたり、劔を帶し履をはきながら、殿上へ上ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重くいましめて深く罪せられにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ榮花といひ、朝恩と申し重職といひ、旁極めさせたまひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。「富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ずいたむ。」と見えて候。心細くこそ候へ、何時までか命生きて、亂れん世をも見候ふべき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目にあひ候重盛が果報のほごこそつた

なく候へ。只今も、侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引き出されて、重盛が頭の刎ねられんずることは、いと易き程の御事にてこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。さて、直衣の袖もしぼるばかりにかきくごき、さめくご泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。(卷二)

三 足摺の事

さる程に、鬼界島の流人共の、召し還さるべき事定まりしかば、入道相國の赦文書いてぞたうでける。御使既に都をたつ。宰相餘りの嬉しさに、御使に、私の使を添へて下されける。夜を晝にし、急ぎ下れごありしかども、心に任せぬ海路なれば、浪風を凌いでゆく程に、都をば七月下旬に出でたれども、長月廿日頃にぞ鬼界島には著きにける。御使は丹左衛門尉基康といふ者なり。急ぎ船より

鬼界島 硫黄島のこと
鹿兒島縣大島郡に屬す
流人共 成經、康賴、俊寛の三人
宰相 參議平教盛、成經の男
七月 治承四年(約七五〇年前)

丹波少將
成經、成親の
子。

熊野詣
二人が島内に
熊野權現を勸
請し之に詣で
たるなり。

波旬
魔王の名、常
に惡意を懷き
惡法を成就し
僧を擾し人の
慧命を斷つと
いふ。

中宮
高倉天皇の皇
后、清盛の女、
平徳子。

禮紙
書狀の上を卷
く白紙。

上り、これに、都より流され給ひたりし平判官康頼入道丹波少將殿
やおはす。と、聲々にぞたづねける。二人の人々は、例の熊野詣して
なかりけり。俊寛一人ありけるが、これを聞きて餘りに思へば、夢
やらん、又、天魔波旬の我が心を誑さんといふやらん、現とも更に
覺えぬものかなとて、あわてふためき、走るともなく倒るゝともな
く、急ぎ御使の前に行き向つて、これこそ流されたる俊寛よ。と名告
り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取
り出でて、奉る。これをあけて見給ふに、重科は遠流に免ず。早く
歸洛の思をなすべし。今度中宮御産の御祈によりて非常の赦行
はる。然る間、鬼界島の流人少將成經、康頼法師、赦免。とばかり書か
れて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見る
にも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀みけれども、二人とば
かり書かれて、三人とは書かれず。さる程に少將や康頼法師も出

故大納言殿
藤原成親

できたり、少將の取りて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人と
ばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝること
はあれ、夢かと思ひなさんと思へば、現なり、現かと思へば、又夢の如
し。その上、二人の人々の許へは、都より言傳てたる文ども、幾らも
ありけれども、俊寛僧都の許へは、言問ふ文一つもなし。されば、我
が縁の者どもは、皆、都の内に跡を止めずなりにけるよと、思ひ遣る
にも覺束なし。抑、我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。いかな
れば、赦免の時、二人は召し還されて、一人爰に残すべき。平家の思
ひ忘れかや、執筆のあやまりか。こは如何したる事どもぞや。と天
に仰ぎ地に伏して、泣き悲しめどもかひぞなき。
僧都、少將の袂にすがり、俊寛がかやうになるといふも、御邊の父
故大納言殿のよしなき謀叛の故なり。されば外の事と思ひ給ふ
べからず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてはこの

船に乗せて、九國の地まで着けて給べ。各、これにおはしつる程こそ、春は燕秋は田の面の雁の音づる、やうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ。今より後は何としてか聞くべき。さて、悶え焦れ給ひけり。少將、誠にさこそは思しめされ候ふらめ。我等が召し還さる、嬉しさも、さる事にては候へども、御有様を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。この船に打乗せ奉りて上りたくは候へども、都の御使、如何にも叶ふまじき由を頼りに申す。その上、赦されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はば、なかなか悪しく候ひなんぞ。成經まづ罷り上つて、人々にもよくよく申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎に人を奉らん。その程は日頃おはしつるやうに思ひなして待ち給へ。命はいかにも大切のここのなれば、たとひこの瀬に洩れさせ給ふとも、終には何か赦免なくて候ふべき。と、さまざまに慰め宣へども、僧都堪へ忍ぶべくも

この瀬
この機會。

見え給はず。



あらましごと
荒々しきこと、精神錯亂のさま。

劇の俊寛(其一)

さるほどに船いださんとしければ、僧都船に乗りては下りつ、下りては乗りつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には夜の衾、康頼入道が形見には一部の法華經をぞ留めける。既に纜解きて船押しいだせば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、さて、各、俊寛をば終に捨て果て給ふか。日頃の情も今は何ならず。赦されなければ都までこそ叶はずとも、せ

めてこの船に乗せて九國の地まで。と、口説かれけれども、都の御使、

「如何にも叶ひ候ふまじ」とて、取り付き給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕ぎ出す。

僧都せん方なさに、渚に上り、倒れ伏し、稚きものの乳母や母などを慕ふやうに足摺をして、これに乗せて行け、具して



(二其) 寛俊の劇

行け。」と宣ひて、をめき叫び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙に暮れて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦佐用姫が、唐船を慕ひつつ、領巾振りけんも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎ隠れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥處へも歸

松浦佐用姫

宣化帝の朝大伴狭手彦任那に赴かむとす用姫これを慕ひて領巾をふりしといふ故事。

領巾

昔時婦人の頂にまきて飾とせし布帛。

早利・即利

早利即利の兄弟、繼母に欺かれて、絶海の孤島に捨てられしこと、浄土本縁經に見ゆ。

二人

成經と康頼。

一人

鳥羽

京都府紀伊郡鳥羽の地たる關門の地たりき。

らず、波に、足打ち洗はせ、露に萎れて、その夜は其處に明かしける。さりとも、少將は情深き人なれば、よき様に申す事もやま、たのみを懸けて、その瀬に身をも投げざりし、心の中こそはかなけれ。昔、早利、即利が海巖山へ放たれたりけん、悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。(卷三)

四 有王島くだりの事

さる程に、鬼界島の流人ども、二人は召し還されて、都へ上りぬ。今一人残されて、うかりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の稚くより、不愆にして召し使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界島の流人ども、今日既に都へ入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行き向ひて見れども、我が主は見え給はず。「いかに」と問へば、それは猶罪深しとて、一人島に残されぬ」と聞きて、心

うしなごも愚なり。常は、六波羅邊にたゞずみて聞きけれども、何時赦免あるべしとも聞きいださざりければ、僧都の御女の忍びておはしける所へ参りて、この瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今は、いかにもしてかの島へ渡りて、御行方をもたづね参らせばやと存じ候。御文賜はつてまゐり候はんと申しければ、姫御前斜ならず悦び、やがて書きてぞたうでける。暇を乞ふとも、よも

夏衣たつを
花ちるといと
ひしものを夏
衣たつやおそ
きと風をまつ
かな拾遺集
盛明親王
薩摩瀉
薩南の海洋を
いふ。
船津
港。



古刊家物語の俊寛と有王

許さじこて、父にも母にも知らせず。唐船の纜は、四月五月に解くなれば、夏衣たつを遅くや思ひけん、彌生の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩瀉へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人

あやしめ、着たる物を剥ぎ取りなごしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじと髻結もといの中には隠しける。

さて商人と船に乗りて、件の島へ渡りて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし畑もなし、里もなし村もなし。おのづから人あれども言ふ詞をも聞き知らず。有王、島の者に行き向ひて、物申さむ。いへば、「何事」と答ふ。「これに、都より流されさせ給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる。」と問ふに、法勝寺とも執行とも知りたらばこそ返事はせめ。只頭を振りて、「知らぬ」といふ。そのうちに或る者が心得て、「いさごよ、左様の人は三人茲にありしが、二人は召し還されて都へ上りぬ。今一人残されてあそここゝよと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず。」とぞいひける。山の方の覺束なさに、遙かに分け入り、峰に攀ぢ谷に下れども、白雲跡を埋めて、往來の道もさだかならず、晴嵐

法勝寺
洛東東山にあ
り。
御行末
御行方。
白雲跡を埋め
て云々
山遊ヤマユウ 雲埋クモヅメ
行客迹ヨウカクノアト 松寒マツサムイ
風破カゼヤブ 旅人夢リョウジンノユメ
(和漢朗詠集、
紀齊名)

沙頭に沙頭刻印、沙頭、水底摸、遊處、水底摸、書雁度時、(和漢朗詠集、大江朝綱)

繼目
骨の關節。

諸阿修羅
報世經に出づ。
三惡、四趣
三惡は地獄、餓鬼、畜生、四趣は三惡に修羅を加へたるもの。

夢を破つては、その面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず。海の邊につきて尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。
ある朝、磯の方より、蜻蛉などの如くに瘦せ衰へたる者、よろほひ出で來たり。本は法師にてありけりと覺えて、髪は空様に生ひ上り、萬の藻屑取りつけて、荊棘かどろを戴きたるが如し。繼目顯れて、皮ゆたひ、身に著たるものは、絹布のわきも見えず。片手には、荒海布を持ち、片手には魚を貫ひて、持ち歩む様にはしけれども、はかも行かず、よろ／＼としてぞ、出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。諸阿修羅等故在大海邊とて、修羅の三惡四趣は、深山大海の邊にありと、佛の説き置き給ひたれば、知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるか、とぞ覺えたる。はや、かれもこれも次第に歩み近づく。若し、かやうの者にても、我が主の御行方や

知りたるを、物申さん。といへば、何事と答ふ。「これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。」と問ふに、わらはこそ見忘れたれども、僧都はいかで忘れ給ふべきなれば、「これこそそれよ。」と宣ひもあへず、手に持てる物を投げ捨てて、沙の上にご倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方は知つてけれ。僧都やがて消え入り給ふを、有王膝の上に搔きのせ奉り、多くの波路を凌ぎつゝ、遙々と此處まで尋ね参つたるか、ひもなく、いかに、やがてうきめを見せんとはせさせ給ひ候ふぞ。と、漣なみ然ごとと搔き口説きければ、僧都少し人心地出で來、助け起され、誠に、汝多くの波路を凌ぎつゝ、遙々とこれまで参つたるこそ、神妙なれ。只明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀しきものごも、面影を、夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたく疲れ弱りて、後は、夢も現も思ひわかず。今汝がきたれるをも、只夢のみこそ覺ゆれ。若

しこの事の夢なりせば、覺めての後は如何せん。有王、こは現にて候ふなり。さても、この御有様にて、今まで御命の伸びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。と申しければ、いささよ、これは去年少將や判官入道が迎への時、その瀬に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の、今一度都の音信をも待てかし。など慰め置きしを、愚に若しやと頼みつゝ、承らへんとはせしかども、この島には人の食物も絶えてなき所なれば、身に力のありし程は、山に登りて硫黄といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に替へなごせしかども、日に添ひて弱り行けば、今は左様の業もせず。かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて、網人釣人に、手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は、貝を拾ひ荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日まではながらへたれ。さらではうき世を渡るよすがをば、いかにしつらんとか思ふらん。

より竹 波に漂ひて奇
寺務職 一寺の事すべ
莊務 寺の莊園の業
業 身口意の三つ
にてもなす行爲
唯悪のむくいへば
悪業といふ。順
後業 順現、順生、順
業により苦樂
の結果を受くる
るに現世なる
の世に受くる
を順業といふ。
來無量世中、未
て受くるを順
後業といふ。
信施無慚の罪
徒に布施を受
修業をなさず
無慚放逸に世
を過す罪。

僧都、これにて、何事をもいはばやごは思へども、いざ、我が家へご宣へば、有王、あの御有様にて、も家を持ち給へる不思議さよご思ひ、僧都を肩に引き懸け参らせ、教に従ひて行く程に、松の一村ある中に、より竹を柱とし、蘆を結び、桁梁にわたし、上にも下にも松の葉をひしご取り懸けたれば、雨風溜るべくも見えず。有王、あなあさまし、本は法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の莊務を司り給ひしかば、棟門平門の内に、四五百人の所従眷屬に圍繞せられておはせし人の、眼のあたりかゝるうきめに逢はせ給ふことの不思議さよ。業にさまぐ、あり、順現、順生、順後業といへり。僧都一期が間、身にもちひる所皆、大伽藍の寺物佛物ならずといふことなし。さるば、かの信施無慚の罪に依りて、今生にてはや感ぜられたりごぞ見えたりける。

僧都、こは現にてありけりご思ひ定めて、去年、少將や判官入道迎

官人
檢非違使廳の
役人。

鞍馬
京都府愛宕
郡。

瘡

今いふ瘡。

三月二日
治承三年。(約
七五〇年前)

への時も是等が文といふともなし。今又汝が便にもかくとも言はざりけり。なご宣へば、有王、涙に咽び、うつぶして暫しは御返事も及ばず。やゝありて起き上り、涙を抑へて申しけるは、君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人参りて資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人をかくしかね参らせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、この童ばかりこそ、時々参つて御宮仕へ仕り候ふなり。いづれも御歎の愚なる方は候はねども、中にも稚き人は餘りに戀ひ参らせ給ひて、参り候ふ度毎に、いかに有王よ、われを鬼界島こかやへ具して参れ。と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、瘡を申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は、その御歎を申し、又この御事を申し、一方ならぬ御物思に思し召し沈ませ給ひて、打ち臥させ給ひしが、去んぬる三月二日の日、遂にはかなくなら

人にも見え
人の妻となる
こと。
人の親の
「人の親の心
は闇にあらね
ども子を思ふ
道にまどひぬ
るかな」(後撰
集、藤原兼輔)

せ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしける。それより御文給ひて参つて候ふ。さて、取り出でて奉る。僧都、これを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、なごや、三人流されおはします人の、二人は召し還されて候ふに何さて一人残されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、女の身程いひがひなきことは候はず。男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、なごか尋ね参らで候ふべき。この童を御伴にて急ぎ上らせ給へ。とぞ書かれたる。これ見よ有王よ。この子が文の書き様のはかなさよ。おのれを伴にて、急ぎ上れと書きたることの恨めしさよ。俊寛が心に任せたるうき身ならば、いかでかこの島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になるご覺ゆるが、これ程にはかなくてはいかでか人にも見え、宮仕へをもして、身をもたすくべきか。さて、泣かれけるにぞ、人の親の

蟬の聲

千峯島路合ミ
梅雨フ、五月蟬
聲送ル、麥秋フ、
(和漢朗詠集)

白月

満月

黒月

満月より後の
缺けたる月。

ござんなれ

こそあるなれ
の轉。

心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られ
れ。

この島へ流されて後は、曆もなければ、月日の立つをも知らず。
只自ら花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲
秋を送れば夏とおもひ、雪の積るを冬と知る。白月、黒月の變り行
くを見ては三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになる
と覺ゆる稚き者も、はや先立ちける、ござんなれ。西八條へ出でし
時、この子が行かんと慕ひしを、やがて還らんずるぞと慰め置きし
が、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りごだにも思はましかば、
今暫くもなごか見ざらん。親となり子となる、夫婦の縁を結ぶも、
皆この世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦し
けれども、それは生身なれば、歎きながらも過さんずらん。さのみ
ながらへて、おのれに憂き目を見せんも、我が身ながらつれなかる

彌陀の名號

阿彌陀佛の
名。

臨終正念

死期に至りて
も心の靜平な
るをいふ。

茶毘

焚燒と譯す。
火葬のこと。

べしとて、食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られ
ける。有王わたりて二十三日と申すに、僧都庵の中にて遂にをは
り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。有王、空しき姿に取りつき奉り、
天に仰ぎ地に伏し、心の行く程泣き飽きて、やがて、後世の御伴仕る
べく候へども、この世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後
世弔ひ参らすべき人も候はず。しばしながらへて御菩提を弔ひ
参らすべし。とて、寢所を改め庵をきりかけ、松の枯枝、蘆の枯葉ひし
と取りかけて、藻鹽の煙と爲し奉り、茶毘事をへぬれば、白骨を拾ひ
首にかけ、又商人船の便にて、九國の地にぞ著きにける。

それより僧都の御女の、忍びておはしける御許に参りて、ありし
様を、始より細々と語り申す。「なか／＼文を御覽じてこそ、いとゞ
御思ひはまさらせ給ひて候ひしか。件の島には硯も紙もなければ、
御返事にもおよばず。思召されつる御事どもは、さながら空し

他生曠劫
此の世以外の世界にて永い間の時間。未
來永劫。

法華寺
奈良縣添上郡
佐保村にある
尼寺。

高野
和歌山縣伊都
郡紀の川の南
岸にあり。

六月九日
治承四年。(約
七五〇年前)

新都
福原なり、兵
庫縣武庫郡、兵
内裏址は兵庫
岡方の西、長
田の東にあり。

くて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き御姿をも見参らせ給ふべき。只いかにもして御菩提を弔ひ参らせ給へ。と申しければ、姫御前聞きもあへ給はず、伏し轉びてぞ泣かれける。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納めつつ、蓮華谷にて法師になり、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。かやうに、人々の思ひなげきのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ。(卷三)

五月見の事

六月九日の日新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましか

舊都
京都。

源氏の大將
源氏物語の主
人公光君。

淡路の迫門
明石郡明石と
淡路國津名郡
松尾崎との間
なる。明石海
峽。

繪島が磯
淡路の北端、岩
屋町の東端。

白浦
和歌山縣日高
郡。

吹上、和歌の
同縣海草郡。
住吉、難波

高砂、尾上
大阪府東成
郡。

伏見
兵庫縣加古
郡。

りつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやう／＼半ばになり行けば、福原の新都にまし／＼ける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大將の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の浦傳ひ、淡路の迫門を押し渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦吹上和歌の浦住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人々は、伏見、廣澤の月を見る。中にも徳大寺の左大將、實定卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。何事も皆變りはてて、稀にのこる家は、門前草深くして、庭上露茂し。蓬が袖淺茅が原、鳥のふしごと荒れはてて、蟲の聲々うらみつゝ、黄菊紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞまし／＼ける。大將その御所へ参り、まづ、隨身を以て、惣門を叩かせらるれば、内より女房の聲にて、誰そや。蓬生の露打ちはらふ人もなき所に、と咎むれば、これは、福原より、大將殿の御

廣澤
京都府葛野郡
嵯峨村の東に
ある池。

淺茅が原

短き茅の野

近衛河原の大

宮

近衛河原は鷹
司の下近衛通
の東河原、大
宮は皇太后藤
原多子、實定
の妹

のぼり候ふ」と申す。「さ候はば、惣門は、鎗のさされて候ふぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將、さらばとて、東の小門よりぞ参られける。

大宮は、御つれづれに、昔をや思召し出でさせ給ひけむ。南面の御格子あげさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大將、つと参られたれば、暫く、御琵琶をさしおかせ給ひて、夢かや現か。これへへ」とぞ仰せける。昔今の物語ごもし給ひて後、小夜もやうく、更け行けば、舊き都の荒れゆくを、今様にこそうたはれけれ。

舊きみやこを來て見れば、淺茅が原こそあれにける。

月のひかりはくまなくて、あき風のみぞ身にはしむ。

と押し返し、三返謠ひすまされたりければ、大宮を初め奉りて、御所中の女房たち、皆袖をぞぬらされける。さる程に、夜もやうやう明け行けば、大將いとま申しつゝ、福原へぞ歸られける。(卷五)

實盛

壽永二年五月
加賀の篠原の
戦に敗死す。

六 實盛最期の事

落ち行く勢の中に、武藏國の住人長井齋藤別當實盛は、存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂に、萌黄威の鎧著て、鍬形打つたる胃の緒をしめ、金作りの太刀を帶き、二十四指したる、截生の矢負ひ、滋藤の弓持つて、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、身方の勢は落ちゆけども、唯一騎返し合せ、防ぎ戦ふ。木曾殿の方より、手塚太郎進み出で、あなやさし。いかなる人にて渡らせ給へば、身方の御勢は皆落ち行き候ふに、唯一騎残らせ給ひたるこそ、優に覺え候へ。名告らせ給へ」と詞を懸ければ、「まづ、かういふ和殿は誰ぞ。」信濃國の住人手塚太郎金刺光盛とこそ名告つたれ。齋藤別當、さては、互によき敵。但し、和殿を下ぐるにはあらず、存ずる旨があれば、名告ることはあるまじいぞ。よれ、組まう、手塚とて、

木曾殿
木曾義仲。
手塚太郎
義仲の將

組んでうすよ
なうれ
組んで失す
よ、な、おの
れの訛。

馳せ並ぶる處に、手塚が郎等、主を討たせじと中に隔り、齋藤別當に
押並べてむずと組む。齋藤別當、あつばれ己は日本一の剛の者と
組んでうすよ、なうれとて、我が乗つたりける鞍の前輪に押しつけ
て、些かも働かさず、頸かき切つて捨ててける。手塚太郎、郎等が討
たる、を見て、弓手に廻りあひ、鎧の草摺引き上げて、二刀刺し、弱る
所を組んで伏す。齋藤別當、心は猛う思へども、軍にはし勞れぬ、手
は負ひつ。その上、老武者ではあり、手塚が下にぞなりにける。
手塚太郎、馳せ來る郎等に首取らせ、木曾殿の御前に參り畏つて、
「光盛こそ、奇異の曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かこ見候へ
ば、錦の直垂を著て候。又、大將軍かこ見候へば、續く勢も候はず。
名告れ〜と責め候ひつれども、遂に名告り候はず。聲は坂東聲
にて候ひつる」と申しければ、木曾殿、あつばれ、これは齋藤別當にて
あるござんなれ。それならんには、義仲が上野へ越えたりし時、稚

糟尾
白髮交りのか
み。

樋口兼光
義仲の傳なる
中原兼遠の長
男、弟兼平、根
井行親、堀親
忠と俱に木曾
の四天王と稱
せらる。

目に見しかば、白髮の糟尾なりしぞかし。今は早七十にも餘り、白
髮にこそなりぬらん、鬢鬚の黒いこそ怪しけれ。樋口次郎兼光
は、年來馴れ遊んで、見知りたるらむ。樋口召せとて召されけり。
樋口次郎、唯一目見て、あな無慚、齋藤別當にて候ふなりとて、涙を流
す。木曾殿、それならむには、早七十にも餘り、白髮にこそなりぬら
んに、鬢鬚の黒いはいかにと宣へば、良、あつて、樋口次郎、涙を抑へて
申しけるは、さ候へば、その様を申し上げんと仕り候ふが、餘りに哀
に覺え候うて、まづ、不覺の泪のこぼれ候ひけるぞや。されば、弓矢
取りては、聊かのごころにても、思ひ出の言をば、かねて使ひ置くべ
き事にて候ひけるぞや。齋藤別當、常は兼光に逢うて、物語し候ひ
しは、六十に餘つて、軍の陣へ向はむ時は、鬢鬚を黒う染めて、若やが
うと思ふなり。その故は、若殿原に争うて、先を驅けんもおこなげ
なし。又、老武者とて、人の侮らむも口惜しかるべしと申し候ひし

大臣殿
内大臣平宗盛。

水鳥の羽音に驚く

富士川の戦に水禽の音をききて平氏の敗走せしこと。

蒲原
庵原郡。

昔の朱買臣は漢の朱買臣家より身を起して武帝に仕へ故郷會稽の太守に拜せられしこと漢書朱買臣傳に見ゆ。

が誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へ。こまうしければ、本曾殿、さもあるらむ。さて、洗はせて御覽ずれば、白髪にこそなりにけれ。

又、齋藤別當、錦の直垂を著ける事も、最後の暇申しに、大臣殿へ参つて、かう申せば、實盛が身一つにては候はねども、先年坂東へ罷り下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱、唯、この事に候。今度、北國へ罷り下り候はば、定めて討死仕り候ふべし。實盛、元は越前國の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事の譬の候ぞかし。故郷へは錦を著て歸るこまうすことこの候へば、なにか苦しう候べき、錦の直垂を御免候へかしと申しければ、大臣殿、優しうも申したりけるものかなとて、錦の直垂を御免ありけるこぞ聞えし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今

會稽山
支那浙江省。

忠度

忠盛の子、清盛の弟、正四位下薩摩守。

俊成

正三位藤原俊成、和歌の名手。千載集の撰者。

の齋藤別當實盛は、その名を、北國の巷に揚ぐこかや。朽ちもせぬ、空しき名のみ留め置きて、骸は、越路の末の塵となるこそ哀なれ。去ぬる四月十七日、平家十萬餘騎にて都を出でし事柄は、何面を向くべしとも見えざりしに、今五月下旬に都へ歸り上るには、その勢僅かに二萬餘騎、流を盡して漁る時は、多くの魚を得ると雖も、明年に魚なし。林を焼いて獵る時は、多くの獸を得ると雖も、明年に獸なし。後を存じて、少々は殘さるべかりけるものを、と申す人々もありけるこかや。(卷七)

七 忠度都落の事

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけむ。侍五騎、童一人、我が身共に混胃七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。忠度と名告り給へば、落人還り來れ

りて、その内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が参つて候。たゞひ門をば開けられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべき事の候。と申されたりければ、俊成卿、その人ならば苦しかるまじ、開けて入れ申せ。とて、門を開けて對面ありけり。事の體、何ごなう物あはれなり。薩摩守申されけるは、先年申し承つてより後は、ゆめ／＼疎略を存せずとは申しながら、この二三箇年は、京都の騒ぎ、國々の亂れ出來、剩へ、當家の身の上に罷りなつて候へば、常に参り寄ることも候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命、今日はやつき果て候。それにつき候うては、撰集の御沙汰あるべき由、承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも、御恩を蒙らうと存じ候ひつるにかゝる世の亂れ出來て、その沙汰なく候條、唯一身の歎きと存じ候。この後、世靜つて、撰集の御沙汰候はば、

撰集
勅撰和歌集。

鎧の引合
鎧の右脇にて
脇指の上にて
合はす所。

前途程遠
前途程遠、馳
思於雁山之暮
雲、後會期遙、
露、縷於鴻臚
之曉淚、和漢
朗詠集、大江
朝綱
雁山
支那の雁門
山。

これに候ふ卷物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の陰にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなりまゐらせ候はんずれ。とて、日來よみ置かれたる歌ごもの中にて、秀歌ご覺しきを、百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打ち立てられける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合より取り出でて、俊成卿に奉らる。

三位、これを開いて見給ひて、かゝる忘形見ごもを賜り候ふ上は、ゆめ／＼疎略を存ずまじう候。さても唯今の御渡こそ、情も深う哀も殊にすぐれて、感涙抑へ難うこそ候へ。と宣へば、薩摩守、骸を野山に曝さば曝せ、憂名を西海の波に流さば流せ、今はうき世に思ひ置くことなし。さらば暇申す。とて、馬に打乗り、冑の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位、後を遙かに見送つて立たれたれば、忠度の聲ご覺しくて、前途程遠、馳、思於雁山、夕雲、と、高らかに口ずさ

千載集
後白河院の院
宣によりて藤
原俊成撰す。



平忠度 (尾形三月筆)

み給へ
ば俊成
卿もい
さゞ哀
に覺え
て涙を
抑へて
入り給

ひぬ。
その後、世靜まつて、千載集を撰せられけるに、忠度のありし有様、言ひ置きし言の葉、今更思ひ出でて哀なりけり。件の卷物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身救勸の人なれば、名字をば顯されず、「故郷花」といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、讀人

知らずこて入れられたる。

さゞなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくらかな

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずさといひながら、恨めしかりし事ごもなり。(卷七)

八 那須與一の事

さる程に阿波讃岐に平家を背いて、源氏を待ちける兵共、あそこ
の嶺こゝの洞より、十四五騎二十騎、うち連れ、馳せ來る程に、判
官程なく三百餘騎になり給ひぬ。「今日は日暮れぬ。勝負を決す
べからず。」とて、源平互に引き退く處に、沖より尋常に飾つたる小船
一艘汀へ向けて漕ぎよせ、渚より七八段許にもなりしかば、船を横
様になす。あれはいかにさ見る處に、船の中より年の齡十八九許

判官
源義經のこ
と、檢非違使
の尉なりけれ
ばいふ。
今日は
文治元年二月
十八日。
段
六間。

志賀の都
今の天津町の
邊、天智弘文
の朝皇居のあ
りし處なり。
ながらの山
近江の西南に
ある山。

女房

申禮門院の雜司にて玉蟲の前。

柳の五衣

表白く裏青き色合を柳といふ。五衣は五重なり。

皆紅の扇

全面紅色に彩つたる扇。

日出したる

金箔にて日輪を出したるもの。

せが

ふなだな。

足白の太刀

帯取の金具を銀にて作りたる太刀。

なる女房の、柳の五衣いっ、まひに紅の袴著たるが、皆紅みなくはなの扇の日出したるを、船のせがひに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よ。とこそ候ふらめ。但し、大將の矢面に進んで傾城を御覽せられん處を、手だれにねらうて射落せよ。の謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん。と申しければ、判官、身方に、射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、手だれども多う候中に、下野國の住人那須太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵には候へども手はきいて候。と申す。判官、「證據があるか。」とさん候。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候ふ。と申しければ、判官、さらば與一呼べ。とて召されけり。

與一、その比は未だ二十許の男なり。褐かちんに、赤地の錦を以て、衽あはれひ端袖あはれひいろへたる直垂に、萌黃威の鎧著て、足白の太刀を帶き、二十四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に、鷹の羽割り合せてはいだりけるぬ

薄截生

薄模様の截生。

ぬため

鹿角にて作りしもの。

仕つとも

仕つは「仕る」を促めていふ關東言葉。

ための鏑をぞさし添へたる。滋藤の弓脇に挟み、胄をば脱いで高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。と宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁に仰せ附けらるべうもや候ふらん。と申しければ、判官大に怒つて、今度、鎌倉を立て、西國へ向はんずる者共は、皆義經が下知を背くべからず。それに、少しも仔細を存ぜん人々は、



（三月形尾）一 與 須 那

まるぼや
寄生木の様を
まろくあらは
したるもの。

これよりさうし、鎌倉へ歸らるべし。とぞ宣ひける。與一重ねて
辭せば悪しかりなんこや思ひけん。さ候はば外れんをば存じ候
はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ。とて、御前を罷り立ち、黒
き馬の太う逞しきに、まるぼや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つた
りけるが、弓取り直し手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。
身方の兵共、與一の後を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずる
と覺え候。と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

二月十八日
文治元年。

矢比少し遠かりければ、海の中一段許打ち入つたりけれども、な
ほ扇の間は、七段許もあらんこそこを見えたりけれ。比は二月十八
日酉の刻許のこなるに、折節、北風烈しう吹きければ、磯打つ波も
高かりけり。船は、ゆり上げゆりする漂へば、扇も、串に定まらずひ
らめいたり。澳には平家船を一面に並べて見物す。陸には、源氏、
轡を並べてこれを見る。いづれもく、晴ならずといふことなし。

我が國

與一の生國下
野國。

日光權現

栃木縣日光山
なる二荒神社
なり事代主命
を祭る。

宇都宮

二荒神社別宮
あり。

湯泉大明神

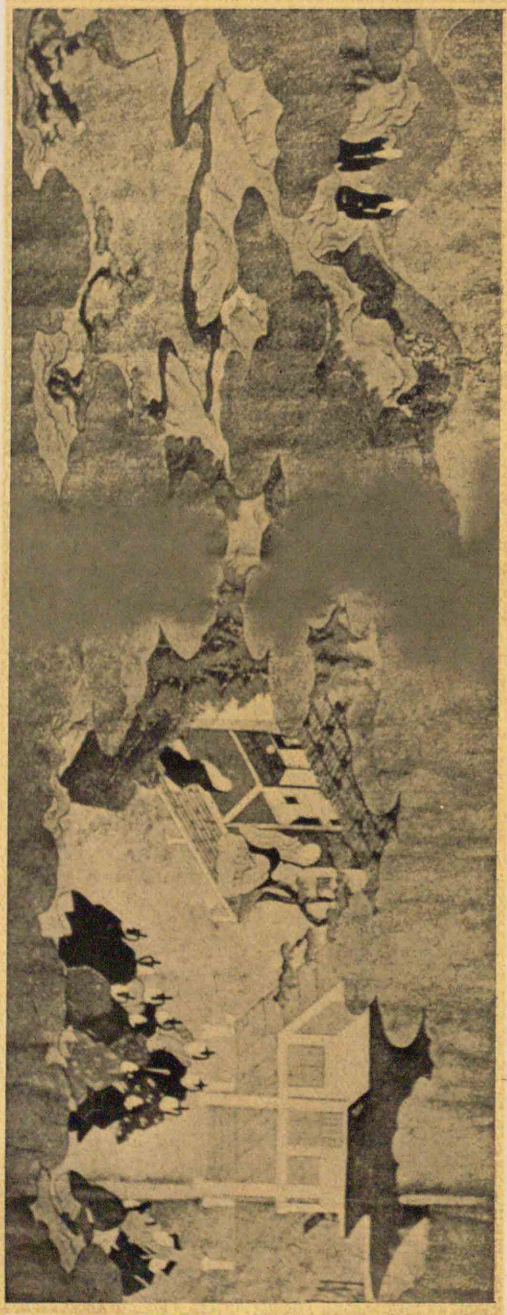
同國那須郡那
須山にあり。

與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては、我が國の神明、日光權現、
宇都宮那須の湯泉大明神、願くはあの扇の眞中射させてたばせ給
へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび
面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思しめさば、この矢は
づさせ給ふな。と、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹
き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、
よつびいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑
は浦響く程に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふ
つとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。
春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇
の、夕日のかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬながれけるを、
澳には平家、舷をたゝいて感じたり。陸には源氏、箆をたゝいて、
よめきけり。(卷十二)

九 大原御幸の事

法皇 後白河法皇。
 建禮門院 平徳子、清盛の二女、高倉帝の皇后。
 北祭 賀茂祭をいふ。四月中の酉の日なり。
 徳大寺 實定
 花山院 兼雅
 土御門 通親
 清原深養父 醍醐天皇の御代の人。
 補陀落寺 京都府愛宕郡静原の山麓。
 小野皇太后宮 後冷泉帝の皇后藤原歡子。その舊址は愛宕郡小野山附近なりといふ。

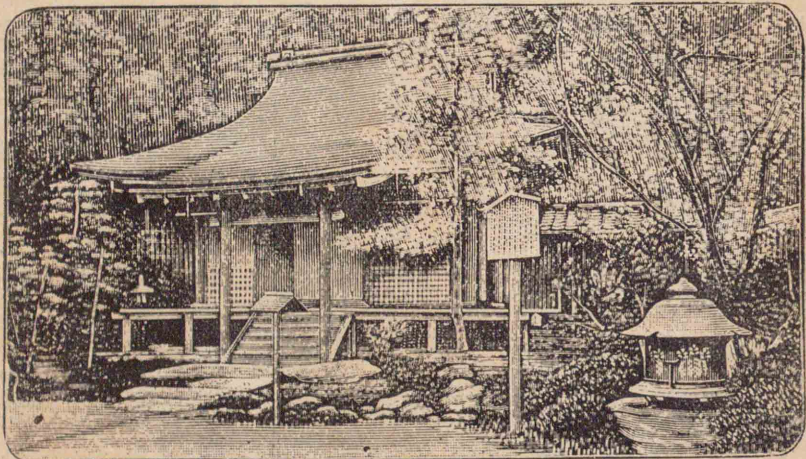
かゝりし程に、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ、御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生の程は、嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず。峰の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏來て、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺、花山院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々侍ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野皇太后宮の舊址、叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘の事なれば、夏草の茂みが末をわき入らせ給ふには、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる



——(物什院光景) 卷繪 幸 御 原 大——

寂光院
天台宗、延暦
寺の別所

青葉交りの
夏山の青葉交
りのおそ初
花よりも珍し
きかな。(金葉
集、藤原盛房)



寂光院本堂

方もなく、人跡絶えたる程も、思召し知られて哀なり。

西の山の麓に、一字の御堂あり。即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水木立、由ある様の所なり。「葢破霧焼不斷、香扉落月挑常住、燭」こも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつ、池の浮草波に漾ひ、錦をさらすかごあやまたる。中島の松に懸れる藤波の裏紫にさける色、青葉交りの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ

雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを
を叡覽ありて、

池水にみぎはの櫻ちりしきて

浪の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間
より、落ちくる水の音
さへ、故び由ある所な
り。緑羅の垣、翠黛の
山、繪にかくとも筆も
及び難し。さて女院
の御庵室を叡覽ある
に、軒には葛朝顔、這ひ
かかり、葱まじりの萱



景全院光寂

顔淵
名は回、孔子
の弟子、孔子

原憲
孔子の弟子、草
譯の中に居り
自ら清うす。

十善
不殺生・不偷
盜・不邪淫・不
妄語・不綺語・不
惡口・不兩舌・不
貪欲・不瞋毒・不
邪見

草、瓢箪屢空、草顔淵が巷に滋し、藜藿深鎖、雨原憲が樞を濕す。こもい
ひつべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も、霜も、置く露も、洩る月影
に争ひて、たまるべし、こも見えざりけり。後は山前は野邊、いさゝ
小篠に風さわぎ、世に立たぬ身の習ひ、こて、憂節、滋き竹柱、都の方の
言傳は、間遠に結へるませ垣や、僅かにこここふもの、こては、嶺に木
傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらがおこづれならでは、まさき
の葛青蘿、くる人稀なる所なり。

法皇、人やあるく、こ召されけれども、御いらへ申す者もなし。

稍、あつて、老い衰へたる尼、一人参りたり。女院は、いづくへ御幸な
りぬるぞ。こ仰せければ、この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。こ
申す。「さこそ世を厭ふ御習、こはいひながら、左様の事に仕へ奉る
べき人もなきにや、御痛は、しうこそ。こ仰せければ、この尼申しける
は、五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御

捨身の行
形身を捨離し
て佛道を修行
すること。

因果經

因果應報の例
を擧げて教訓
せる經、宋の
求那跋陀羅の
譯四卷

悉達太子

釋迦の太子た
りし時の名。

伽耶城

印度摩揭陀國
にあり、佛成
道の靈地。

檀特山

印度健陀羅國
にあり。

信西

俗名藤原通
憲。

紀伊の二位

紀伊守藤原範
元の女朝子に
て、藤原通憲
の妻、白河法
皇の乳母なり
き。

覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候
べき。因果經には、欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。
と説かれたり。過去未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つやつ
や、御歎きあるべからず。昔、悉達太子は十九にて伽耶城を出でて、
檀特山の麓にて、木の葉をつらねて膚を隠し、嶺に上つて薪を取り、
谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の功に依つてこそ、遂に成等正覺し
給ひき。とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布の
分をも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、
かやうの事申す不思議さよと思召して、抑、汝はいかなるものぞ。と
仰せければ、この尼さめく、と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。
や、あつて涙を抑へて、申すにつけて、憚覺え候へども、故少納言入
道信西が女、阿波内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さし
も御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけて

來迎の三尊

阿彌陀如來、
勢至菩薩、觀
世音菩薩をい
ふ。

中尊

三尊の中央に
立つ阿彌陀如
來。

普賢

菩薩の名、華
嚴三聖の一、
經三佛の右の
脇に乘れるさま
に描かる。

善導和尚

隋の名僧、淨
土の教義を鼓
吹せし人。

も、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。とて、袖
を顔に押し當てて、忍びあへぬ様目も當てられず。法皇、げにも汝
は阿波内侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。
何事につけても、唯夢このみこそ思召せ。とて、御涙せきあへさせ給
はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、
理にて申しけり、とぞ各感じ合はれける。

さて、彼方此方を觀覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつ
つ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御
庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて觀覽あるに、一間には、
來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられた
り。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の
妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ
立ちのぼる。かの淨名居士が方丈の室の中に、三萬二千の床を並

八軸の妙文
法華經なり。
八卷ある故に
いへり。

九帖の御書
善導の觀無量
壽經の疏なり。
九卷あり。

淨名居士

維摩詰。經迦
佛の弟子にて、
方丈の室にて、
萬二千の諸佛
を請來せしと
いふ。

大江定基

永延二年入道、
長保四年宋に
渡れり。圓通
大師の號を賜
はる。

清涼山

五台山ともい
ふ。支那山西
省にあり。

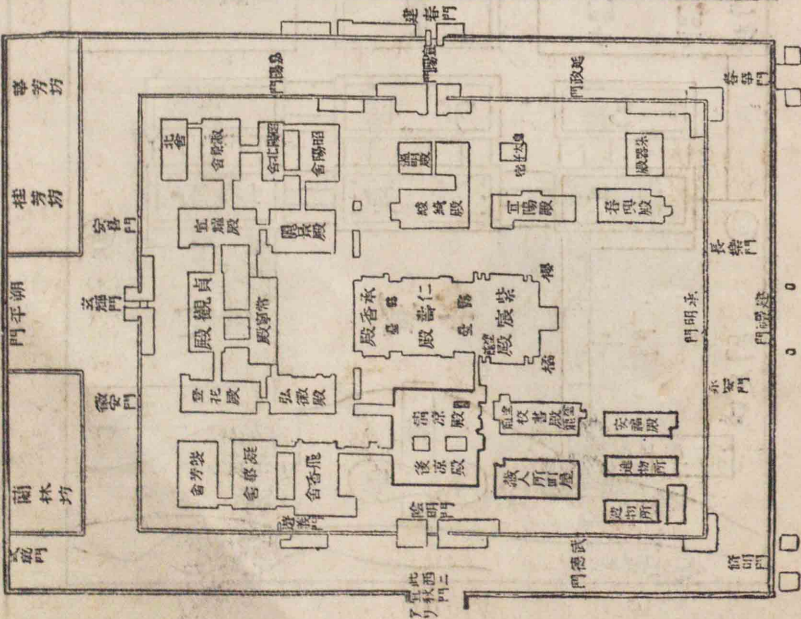
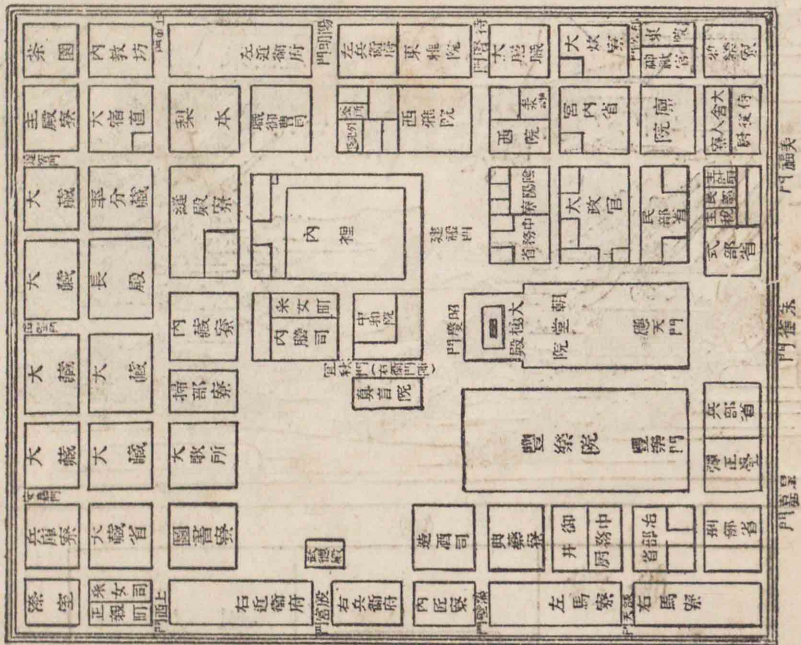
べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやごぞ覺えける。障子には、諸經の要文ごも、色紙に書いて所々に押されたり。その中に大江定基法師が、清涼山にて詠じたりけん、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。ごも書かれたり。少し引き退けて、女院の御歌ごおぼしくて、思ひきや深山の奥にすまひして

くもゐの月をよそに見むごは
さて傍を窺覽あるに、御寢所ごおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣紙の衾なんごかけられたり。さしも本朝漢土の妙なる類、數を盡し、綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

や、あつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかげを傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。ご仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐臂にかけ、岩躑躅取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせたまひ候。爪木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實の女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐局。ご申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡らされける。女院は、世を厭ふ御習ごいひながら、今かゝる有様を見えまゐらせむずらん慚しさよ。消えも失せばやご思召せごもかひぞなき。宵々毎の閑伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も滋くして、絞りやかねさせ給ひけん。山へも歸らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましゝたる所に、内侍の尼まありつゝ、花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候ふべき。はや、御見參あつて、還御なしまゐらせ候へ。」ご申しければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入

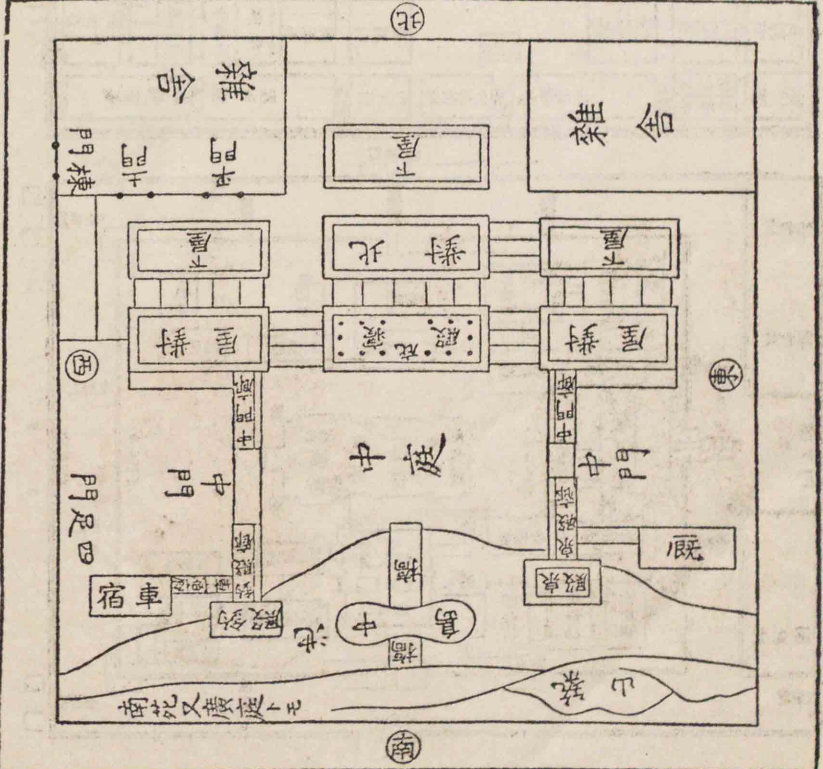
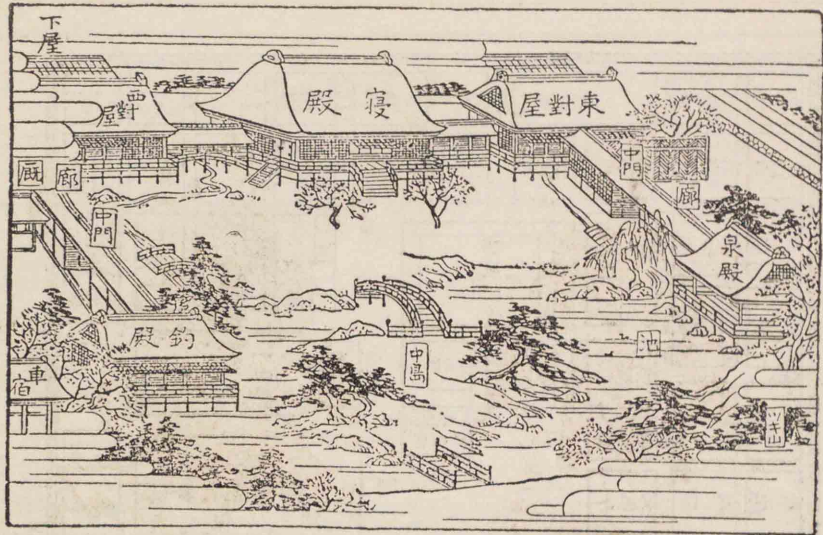
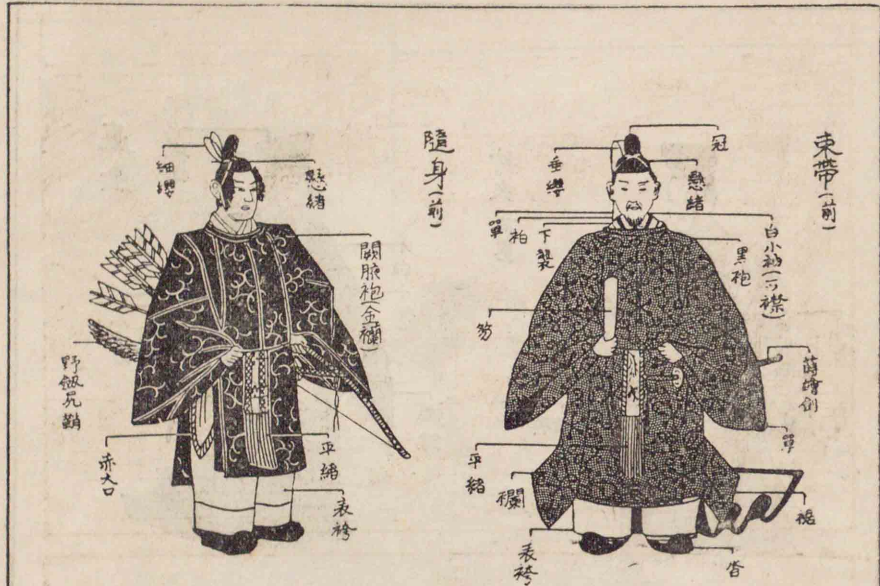
内侍の尼
阿波の内侍。



聖衆
極樂の諸苦

らせおはします。二念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。とて、御見参ありけり。(灌頂の卷)

國語讀本 卷六終





大正十三年十二月十六日印刷
 大正十三年十二月十九日發行
 大正十四年二月二十一日訂正再版印刷
 大正十四年二月二十四日訂正再版發行
 昭和三年十一月一日改訂印刷
 昭和三年十一月四日改訂發行
 昭和四年三月十七日改訂再版發行
 昭和四年九月廿四日改訂參版發行



不許
 複製

發行所

株式會社 成社
 東京市京橋區加賀町一番地

電話銀座(57)二四九四番
 振替東京一二〇五五番

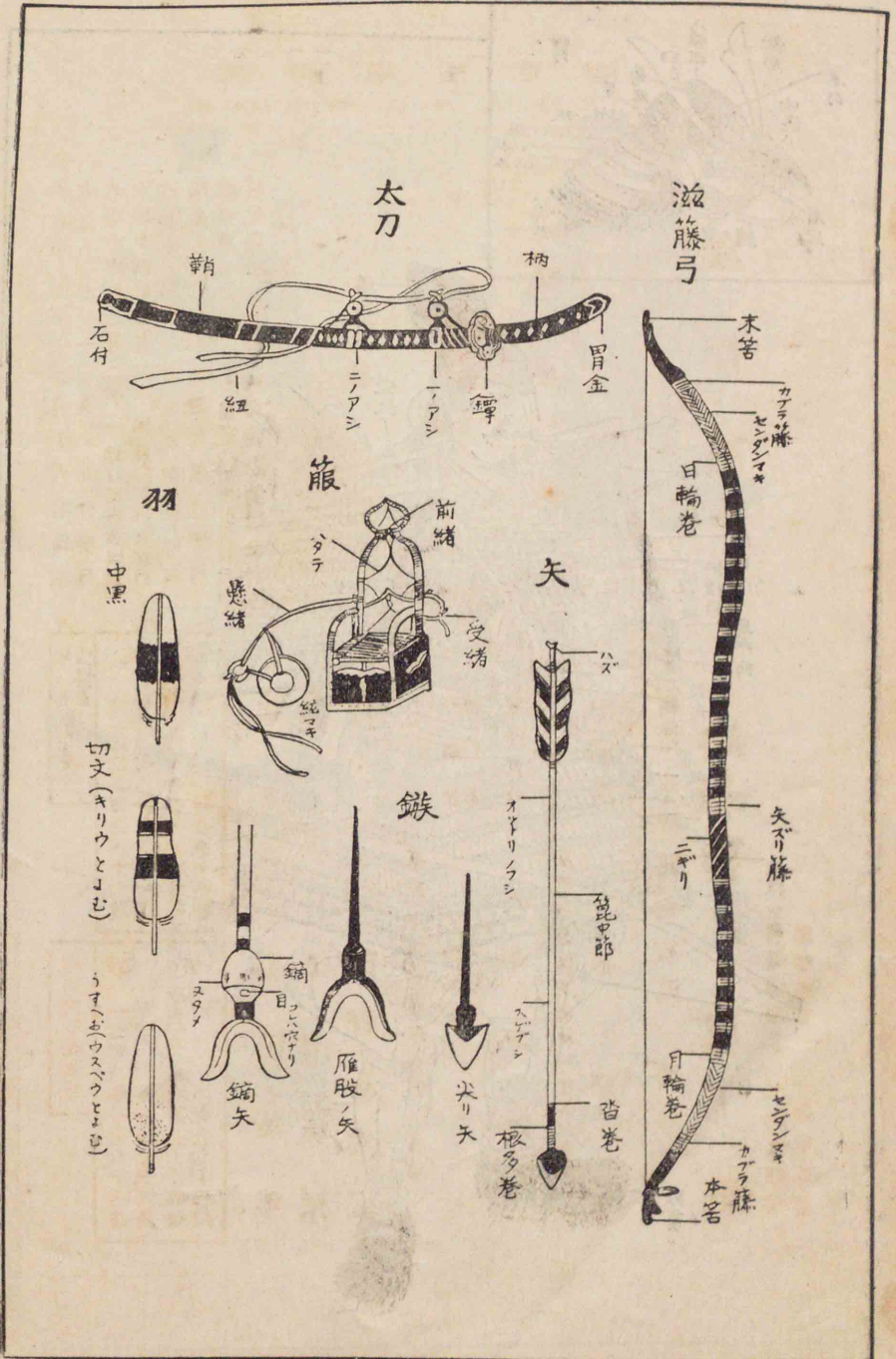
印刷所 日進舎

右代表者 布津純一
 發行所 株式會社 成社
 印刷者 株式會社 成社

同編者 上田萬年
 同編者 榮田猛猪
 同編者 鹽野新次郎

價定	昭和四年國語讀本
一、二、三各卷金四十七錢	
五、六、八各卷金四十六錢	
七、九、十各卷金四十五錢	
卷金四十四錢	

價定	昭和四年度臨時
一、二、三各卷金七十八錢	
五、六、八各卷金七十六錢	
七、九、十各卷金七十五錢	
卷金七十三錢	



廣島県立廣島工業學校

第二學年

宗岡 湊

